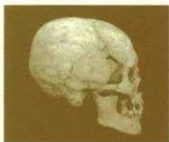


垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

くぬぎ ぼる
柁 原 貝 塚

(平成7年度調査)



1996年3月

鹿児島県垂水市教育委員会

垂水市立図書館



110086147



遺構檢出状況



2号土坑墓人骨



出土土器 (中鉢・浅鉢)



有溝砥石 (307)

序 文

垂水市は、「心あたかい人々の住む、文化の香り高いまちづくり」を基本にして、心豊かで活気に満ちた生涯学習のまちづくりをすすめています。

この報告書は、周知の移居遊跡群内における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財確認調査を、県の補助事業として実施したものの記録です。

今回、確認調査の実施及び報告書の作成にあたりましては、鹿児島県教育庁文化課のご指導、並びに鹿児島県埋蔵文化財センターからの調査員の派遣と献身的なご尽力をいただき、予定しました事業を無事に終えることができました。

ここで改めて、ご指導・ご協力を賜りました鹿児島県教育庁文化課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、そして、発掘作業及び整理作業協力者をはじめとする関係各位に心から敬意を表しますと共に、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

終わりに、本報告書が今後の文化財保護・学術研究のために広く活用されますことを心から祈念致します。

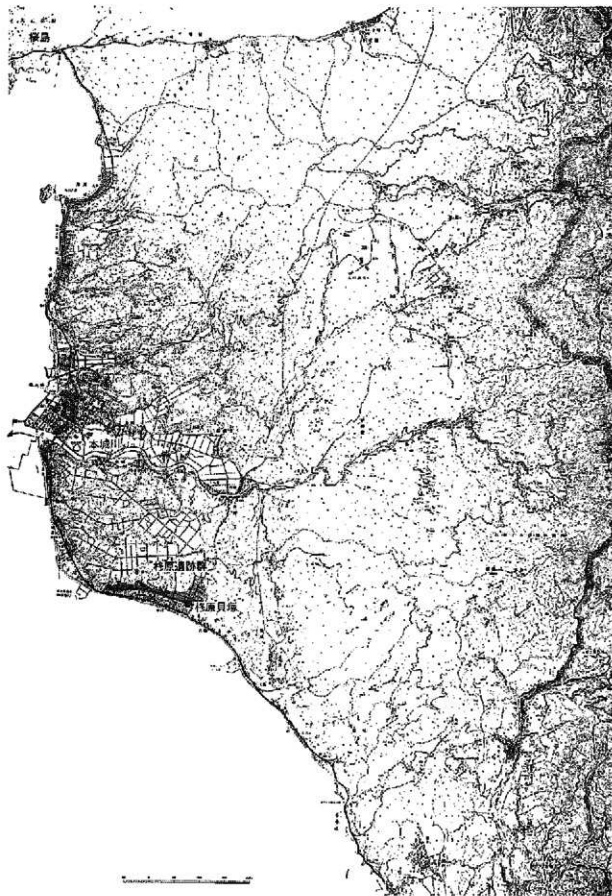
平成8年3月

垂水市教育委員会

教育長 塩 釜 繁

報告書抄録

ふりがな		くぬぎばるかいづか								
書名		杉原貝塚								
副書名		個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次										
シリーズ名		垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ番号		1								
編著者名		筒科 一伸, 今村 敏照								
編集機関		垂水市教育委員会								
所在地		〒891-21 鹿児島県垂水市旭町61-2 TEL 0994-32-0224								
発行年月日		1996年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因		
		市町村	遺跡番号							
杉原貝塚 <small>くぬぎばるかいづか 杉原下</small>	鹿児島県 垂水市 杉原	462144	11-85	31°	130°	19950619~	95	個人住宅 建設		
						27'			43'	
						11°			39'	19950721
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
杉原貝塚	集落 墓址	縄文 (晩期)	竪穴住居址 2基 土坑墓 2基	縄文晩期土器・石鏃・ 石斧・石錐 有溝銀石・石皿 軽石製品	縄文人骨					
		中・近世	溝状遺構	青磁・白磁						



付図 杉原貝塚の位置

例 言

- 1 本報告書は、平成7年度に垂水市教育委員会が行った個人住宅建設に伴う移原貝塚の埋蔵文化財確認調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業中は鹿児島県考古学会会長河口貞徳氏、鹿児島大学教授上村俊彦氏、同助手本田道輝氏の指導を受け、人骨については鹿児島大学教授小片正彦氏、同助手峰和治氏、同助手竹中正巳氏、土器の分類については鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財研究員前田亮一氏、赤色顔料の分析は同文化財研究員大久保浩二氏の協力を得た。
- 3 本書に用いたレベル数値は海抜絶対高度である。
- 4 本書の遺物番号は通し番号を用い、図版中の番号も一致する。
- 5 発掘調査ならびに整理作業における出土遺構・遺物の測量・実測・製図・写真撮影等は齋岡・今村が行い、第13図に関する実測・製図は峰が行った。
- 6 本書の執筆担当は以下のとおりである。
第I章、第II章、第III章第1・2節、同第5節6
論調一併
第III章第3・4節、同第5節1～5、第IV章
今村敬照
第V章
峰 和治・竹中正巳・小片正彦
- 7 本書の編纂は齋岡・今村が行った。
- 8 本遺跡の出土遺物は垂水市教育委員会が保管・展示するものである。

本文目次

序文	
例言	
目次	
第I章 調査の経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	1
第II章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地形概観	3
第2節 地質概観	3
第3節 歴史概観及び周辺の遺跡	3
第III章 発掘調査	7
第1節 調査の概要	7
第2節 順序	7
第3節 縄文時代の遺構	11
第4節 中・近世の遺構	18
第5節 出土遺物	20
第IV章 ま と め	56
第V章 垂水市移原貝塚出土の縄文時代人骨	60

挿 図 目 次

付 図 移原貝塚の位置	
第1図 垂水の地質概略図	4
第2図 周辺の遺跡	5
第3図 調査地点とトレンチ配置図	8
第4図 土層断面と遺物出土状況	9
第5図 1トレンチⅴb層上面遺構検出状況	11
第6図 1号住居址	12
第7図 1号住居址遺物出土状況	13
第8図 1号住居址出土遺物	13
第9図 2号住居址	14
第10図 1号土坑墓	15
第11図 1号土坑墓出土遺物	16
第12図 2号土坑墓出土遺物	16
第13図 2号土坑墓	17
第14図 溝状遺構内出土遺物	18
第15図 溝状遺構検出状況	19
第16図 出土遺物実測図1 (Ⅰ～Ⅲ類土器)	21
第17図 出土遺物実測図2 (Ⅳ～Ⅴ類土器)	23
第18図 出土遺物実測図3 (Ⅵ・Ⅶ類土器、中～後期土器底部・土製円蓋状加工品)	24
第19図 出土遺物実測図4 (Ⅷa・Ⅷb類土器)	27

第20回	出土遺物実測図5 (Ⅷb 類土器)	28
第21回	出土遺物実測図6 (Ⅷc～Ⅷd 類土器)	29
第22回	出土遺物実測図7 (Ⅷ類土器)	30
第23回	出土遺物実測図8 (Ⅷ・Ⅷ類土器)	31
第24回	出土遺物実測図9 (Ⅷa・Ⅷb 類土器)	32
第25回	出土遺物実測図10 (Ⅷc・Ⅷd 類土器)	33
第26回	出土遺物実測図11 (Ⅷa～Ⅷd 類土器)	34
第27回	藝術文を有する壺形土器	35
第28回	出土遺物実測図12 (弥生土器・須恵器・石編)	36
第29回	出土遺物実測図13 (石鏃・楕形石器・石錐・スクレイパー・石匙・石製円盤状加工品)	43
第30回	出土遺物実測図14 (石鏃・石棒状未製品・磨製石斧)	44
第31回	出土遺物実測図15 (打製石斧1)	45
第32回	出土遺物実測図16 (打製石斧2)	46
第33回	出土遺物実測図17 (打製石斧3)	47
第34回	出土遺物実測図18 (擦り切り石器・有溝磁石)	48
第35回	出土遺物実測図19 (石鏟)	49
第36回	出土遺物実測図20 (磨石・礫石・凹石)	50
第37回	出土遺物実測図21 (石皿)	51
第38回	出土遺物実測図22 (磁石製品1)	52
第39回	出土遺物実測図23 (磁石製品2)	53

表 目 次

付 表	報告書抄録	
第1表	周辺遺跡地名表	6
第2表	遺構内出土遺物観察表	19
第3～7表	出土土器観察表 (1)～(5)	37～41
第8・9表	出土石器計測表 (1)・(2)	54・55

図 版 目 次

巻頭図版1		
巻頭図版2		
図版1		71
図版2		72
図版3		73
図版4		74
図版5		75
図版6		76
図版7		77
図版8		78
図版9		79
図版10		80

第I章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

垂水市教育委員会は、平成5年12月に垂水市柗原柗原下地区の周知の遺跡である柗原遺跡群内に個人住宅の建設を知り、鹿児島県教育庁文化課の指導を受け、市内在住の地権者の代理人と、文化財保護と住宅建設の調整を図るため協議を行った。その結果、埋蔵文化財に対する深い理解をいただき、事業対象地域内において埋蔵文化財確認調査（以下確認調査）を実施することになった。

確認調査は垂水市教育委員会が主体者となり、鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。

第2節 調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査主体者	垂水市教育委員会		
調査責任者	◇	教 育 長	塩 登 篤
調査企画	◇	社会教育課長	岩 谷 口 新
調査事務	◇	社会教育係長	藤 下 利 行
調査担当者	◇	社会教育係主事	關 頭 一 伸
	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		文化財研究員	今 村 敏 照
出土遺物指導	鹿児島県考古学会	会 長	河 口 貞 徳
	鹿児島大学法文学部	教 授	上 村 俊 雄
		助 手	本 田 進 輝
	鹿児島大学歯学部	教 授	小 片 丘 彦
		助 手	降 和 治
		◇	竹 中 正 巳

発掘調査及び整理作業員

安 築 求・盛王子光義・永峯善則・鹿屋ツギエ・吉水二美・松元スギ・神田ハル子・
 迫田タマ子・上妻奈緒美・川原富士子・西尾衣久美・安田道子・宮迫良子・船岡亜由美・
 鶴岡弘子・迫田清子・伊集院香代子・盛岡幸子・今村むつみ・権元俊子

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成7年6月19日～平成7年7月21日まで行い、以後平成8年3月まで報告書作成のための整理作業を実施した。

発掘調査の経過は以下の日誌抄のとおりである。

第II章 遺跡の位置と環境

〔日誌抄〕

- 6月19日(月) 発掘調査開始。発掘調査の説明と注意。調査環境(プレハブ及びテント設置、用具の搬入等)の整備。1トレンチ(10×10m)と2トレンチ(4×5m)を設定。1トレンチについてはその中を5×5m格子状に4分割してA-1・2区、B-1・2区とし、重機による表土層の除去をA-2区とB-1区で行い、人力による掘り下げを開始する。
- 6月20日(火) 重機による2トレンチの表土層の除去、以後人力による掘り下げを開始する。
- 6月22日(木) B-1区のIVb-Va層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。
- 6月23日(金) × 1トレンチのA-2~B-1区に延びる溝状遺構の検出。
- 6月26日(月) B-1区のVa層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ
- 6月27日(火) × 2トレンチをVa層まで掘り下げ。
- 6月28日(水) A-2, B-1区のVa層, 1トレンチの溝状遺構内, 2トレンチのIVb層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。2トレンチの溝状遺構の検出。
- 6月29日(木) トレンチ配置図作成。A-2区のIVb層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ、及び上層断面図作成。A-2区の1号土坑墓の検出。
- 6月30日(金) B-1区, 2トレンチのVa層, 2トレンチの溝状遺構内遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。A-2区の1号土坑墓の検出・実測・写真撮影。
- 7月5日(水) A-2区の1号土坑墓, Va層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。
B-1区の遺構内Vb層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。
2トレンチのVa層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ・上層断面図作成。
- 7月6日(木) 重機によるA-2区と2トレンチの埋め戻し、及びB-2区の表土層の除去、以後人力による掘り下げ開始。
- 7月7日(金) B-2区のVa層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。
- 7月10日(月) B-2区のVa層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。
- 7月11日(火) B-2区のVb層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ・トレンチ配置図作成。
B-1区の1号住居跡とB-2区の2号住居跡の検出。
- 7月12日(水) B-2区のVb層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。
- 7月18日(火) B-1・2区の遺構内Vb・Vc層遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。
- 7月19日(水) B-1区のVb層出土土器の実測・写真撮影・取り上げ。B-1・2区の土層断面図作成。B-2区の2号土坑墓の検出。
- 7月21日(金) B-2区の2号土坑墓検出・実測・写真撮影、遺物の取り上げ。B-1・2区の遺構配置図作成。B-1・2区の埋め戻し。
本日をもって発掘調査終了。

第1節 地形概説

椋原貝塚は、垂水市街地の南東約5km(北緯31°27'11", 東経130°43'39")に位置する。

垂水市の地形は、大きく3地域に分けることができる。東方の高隈山地を中心とする山地、その麓から鹿見島湾近くまで緩傾斜をなして広がるいわゆるシラス台地、及び台地間や海岸にある沖積平野の3つである。

シラス台地は、高隈山地と接する部分が海拔約200mであるが、西方ほど次第に低くなり、市街地付近では高さ数10mの断崖を建ね海岸に臨んでいる。遺跡の北上にある上野原台地では、東方から約1.5°の傾斜角をもって西方へ低く傾いている。

遺跡の位置するところは、台地間の扇状地状の沖積平野が海岸線に出会う手前、もしくは台地と海岸線との間に存在する台地縁辺部の崩土の堆積による小微高地であり、海岸線に沿って存在する。

第2節 地質概説

先述の第1節で分けた山地帯は、白亜系の四万十帯礫層の高隈山帯(橋本, 1926)に相当し、海成地すべり堆積物を挟む砂岩頁岩互層の高隈山層(太田・河内, 1965)と牛根層(小川内・岩松, 1986)部分が中新生後期(14Ma)の高隈山花崗岩(柴田, 1978)の貫入に伴いホルンフェルス化している。

その山地から、侵食・選別・堆積作用を受け扇状地状の垂水砂礫層を形成、その上に旧期ローム層、大隅降下軽石層・豊屋火砕流堆積物・竜刺坂角礫層・入戸火砕流堆積物・新期ローム層及びそれらの二次堆積物からなるいわゆるシラス台地を構成している。

沖積層は砂や粘土、小石からなる。

特筆すべき点は、透水性の高いシラスの直下に緻密な旧期ローム層が堆積しており、それが不透水層となり、シラス台地縁辺部の崖下において湧水がしばしばみられる点である。本調査区域の周辺の沖積平野においても地表面下1~2mの深さで水が湧き出る。

第3節 歴史概説及び周辺の遺跡

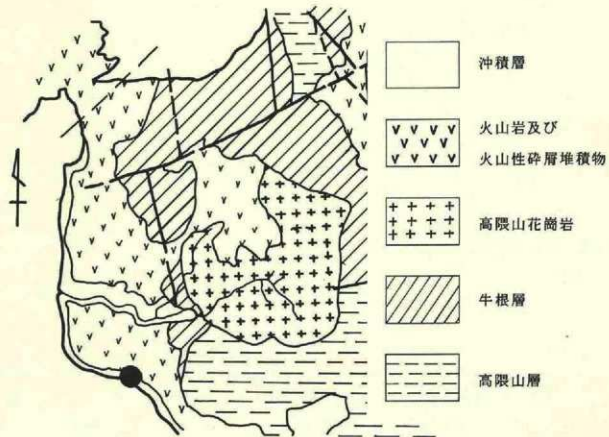
垂水市史によると、「過去において考古資料となる遺跡は少なかった。」とある。しかし近年の鹿見島景観教育委員会による広域分布調査の結果、今回調査を行った地域周辺においても、第2図及び第1表にみられるように縄文~中世の線跡まで様々な遺跡が点在していることが分かってきた。その大部分は台地上と海岸線沿いの沖積平野に集中し、古墳時代のものが多い。

今回の調査のような縄文時代の遺跡は少ないが、「昭和37年に海部地区の協和小学校内及び昭和38年に牛根境地区の境小学校内において縄文土器が出土した。」(垂水市史)とあることより、垂水市においても古くから鹿見島湾沿いの沖積平野を中心とした人々の営みがあったと解釈される。

また本調査地を含む浜平~椋原地区(詳細な地点は不明)を、大正4年に英国のマノン博士が遺跡の調査に訪れている(垂水市史、芹沢長介 1977)。

【参考文献】

- 太田 良平 「5万分の1地質図幅「垂水」および河説明書」 1964 地質調査所
 垂水市教育委員会 「垂水市史 上巻」 1974
 橋本 勇 「九州南部における時代未詳層群の総括」
 (『九大教養地学研報 9 13-69』 1962)
 小川内良人ほか 「大隅半島四万十帯の地質構造」
 (『鹿大理学部紀要(地学・生物学) 19』 1986)
 柴田 賢 「西日本外帯における第三紀花崗岩貫入の同時性」
 (『地調月報 29 551-554』 1978)
 KOBAYASHI et al 「Thickness and Grain-size Distribution of the Osumi Pumice Fall
 Deposit from the Aira Caldera」
 (『Bull. Volcanol. Soc. Japan. 2 28 2 129-139』 1983)
 荒牧 重雄 「始良カルデラと入戸火砕流」 (『月刊 地球Vol.5 2』 1983)
 芹沢 長介 「マンローがケンブリッジ大学に寄贈した日本の資料その他について」
 (『考古学研究 第24巻 第3・4号』 1977)
 垂水市教育委員会 「垂水市史料集(十一) 移原編」 1996



第1図 垂水の地質概略図



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	本 迫	浜平水道	平地	弥生	弥生土器片	垂水市史
2	本 城 跡	本城城跡下	平地	弥生	弥生土器片	垂水市史
3	宇下芝城跡	本城上本城	台地上	弥生	弥生土器片	垂水市史
4	浜 平	浜平	台地	古墳	成川式土器	
5	一帯道城跡	浜平水道	台地上	古墳	古墳土器片	垂水市史
6	道 原	浜平	台地上	古墳	成川式土器	
7	平 谷	浜平	台地上	古墳	成川式土器	
8	尾道城跡	浜平水道	台地上	古墳	弥生土器片	垂水市史
9	高 尾	浜平	台地上	古墳	成川式土器	
10	小 瀬 内	修原	台地上	古墳	成川式土器	
11	西 ヲ 迫	修原	台地上	古墳	成川式土器	
12	一本松後	修原	台地上	古墳	成川式土器	
13	藤 ヶ 崎	修原	台地上	古墳	成川式土器	
14	佐 ヶ 迫	修原後ノ迫	平地	古墳	成川式土器	
15	大 迫	修原	台地上	古墳		
16	野 砂	修原朝砂	平地	弥生	弥生土器片	垂水市史
17	修原遺跡群	修原	平地	縄文・古墳	瓦葺	広範囲の遺跡
18	修原貝塚	修原下	平地	縄文	縄文・古代	今回調査
19	宮ノ前	新城	平地	縄文・古墳		
20	前 塚	新城	平地	縄文・古墳		
20	重 田	新城重田	平地	古墳		
22	城 跡	高城本高城	台地	弥生		
23	高 城 跡	高城小学校	台地上	弥生		垂水市史
24	横 道	高城院	谷ノ尾根	古墳	成川式土器	
25	西 ヶ 迫	院西ノ迫	山 麓	弥生	弥生土器片	垂水市史
26	小 谷	前城 小谷	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
27	大 丸	前城 小谷	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
28	宮 籠	前城 小谷	沖積地	古墳・歴史	土師器	平成3年農政分布
29	東 堂	前城 小谷	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
30	高 松	前城 通川内	沖積地	縄文・歴史	土器片	平成3年農政分布
31	溝 跡	新城 深路下樋得平	平地	弥生	弥生土器片	垂水市史、 資料館上田観理方調査
32	松 崎	新城 深路	沖積地	縄文・古墳	土器片	平成3年農政分布
33	須 崎	新城 大郡	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
34	横 間 下	新城 大郡	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
35	竹 下	新城 大郡	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
36	新 木	新城 田平	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
37	朋 原	新城 宇佐庵	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
38	中 宮 田	新城 宇佐庵	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
39	田中川内町 田平宅地	新城 田中川内田平	平地	弥生	弥生土器片・甕	垂水市史、資料館 田平宅地調査
40	小 瀬 迫	新城 大沢	平地	古墳	成川式土器	
41	宮 下	新城 大沢	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
42	徳王寺口	新城 徳王寺	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
43	堀 王	新城	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布
44	井ノ尾	新城	沖積地	古墳	成川式土器	平成3年農政分布

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査の概要

確認調査は、事業対象区（個人住宅敷地）内において、住宅と車庫兼倉庫2ヶ所の建設予定地にそれぞれ10×10mと4×5mのトレンチ（1・2トレンチと呼称）を設定して実施した。

1トレンチについてはその中を5×5mの格子状に四分割し、A-1・2区、B-1・2区とした。調査はまずA-1区、B-2区と2トレンチで開始した。

その結果、地表面下約1.3～2.2mのところで平均約60cmの遺物包含層を確認した。包含層は次節のように細分でき、縄文時代前期一中・近世の遺物が出土した。本遺跡の主体は出土遺構・遺物から判断して縄文時代晩期と想定される。

主な遺構・遺物として、1トレンチA-2区の1号土坑墓及びほぼ完全体の縄文人骨を伴うB-2区の2号土坑墓、同B-1区の有溝砥石や注口土器等があげられる。

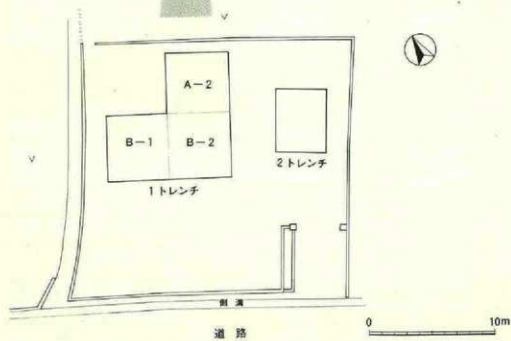
A-2区と2トレンチの調査を終了し2ヶ所を埋戻した後、B-1区の遺構検出に際し、その形態や規模・方向性を知るためにB-2区の調査を開始した。その結果、1・2号住居跡と2号土坑墓が検出された。また、全体的に土層が海岸に向かって低く傾斜しているためB-1・2区に遺物の集中がみられた。A-1区は調査区の現状から、包含層及び遺構面は後世の削平を受けていると判断し調査を行わなかった。

今回は、貝塚として調査におよんだが、対象区内において貝層の確認はできなかった。しかし周辺の畑地から土器片に混ざって貝殻も表面採集でき、また過去の文献や地域住民の聞き取り調査等によると、遺跡周辺には「塚」とよばれていたものがあったそうである。更なる発明を、今後の調査に期待したい。

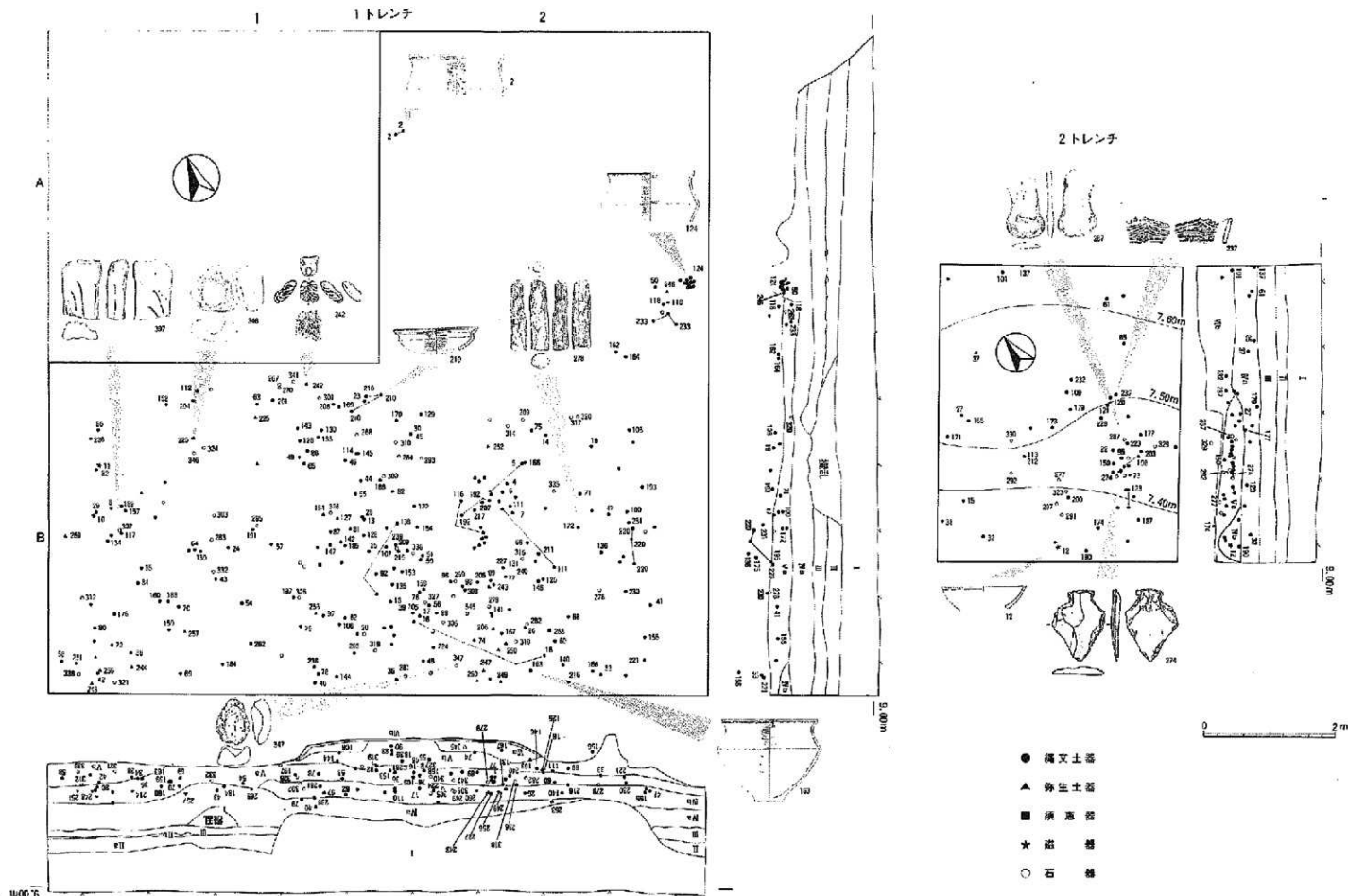
第2節 層 序

場所により多少の相違はあるが、基本的には以下のとおりである。

I 層	表 土	石敷・土器片・貝殻等の散布
II 層	淡灰白色土	
III 層	濁茶褐色土	
IVa 層	淡黒褐色土	
IVb 層	黒褐色土	縄文時代晩期一中・近世の遺物包含層
— 溝 状 遺 構 —		
Va 層	黄褐色土	縄文時代前期～古代（主体は縄文晩期）の遺物包含層
Vb 層	暗灰褐色土	縄文時代前期～古代（主体は縄文晩期）の遺物包含層
VIa 層	淡灰白色砂質土	非常に層薄で遺構内のみで確認（VIb層の2次堆積層）
— 竪穴住居土、土坑墓 —		
VIb 層	濁乳白色土	シルスの2次堆積層
VII 層	濁乳白色砂質土	シルスの2次堆積層



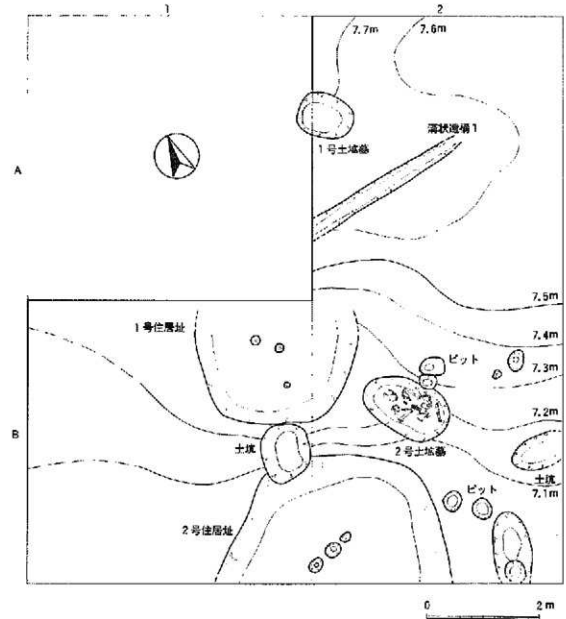
第3図 調査地点とトレンチ配置図



第4図 土層断面と遺物出土状況

第3節 縄文時代の遺構 (第5図)

1 トレンチのB-1・2区より竪穴住居址が2基、A-1及びB-2区より土坑墓が2基検出された。すべてVb層上面での検出である。それぞれの遺構は非常に近接しており、特に1・2号住居址と2号土坑墓は相互距離が約40~60cmである。遺構内の埋土はすべてVb層の2次堆積と思われる淡灰白色砂質土 (Vb層) で、住居址の中央上部にはVb層がレンズ状に堆積していた。このVb層からは縄文時代後期から古代までの遺物が混在して出土するため後世の流入土と考えられ、遺構内のVb層出土遺物は遺構の時期決定の判断には用いられない。そのためVb層出土遺物のみを遺構内出土遺物として取り扱った。1号住居址床面からは完形に近い縄文土器が、1・2号土坑墓内からは縄文土器とともに人骨が検出された。以下、各遺構について詳述する。



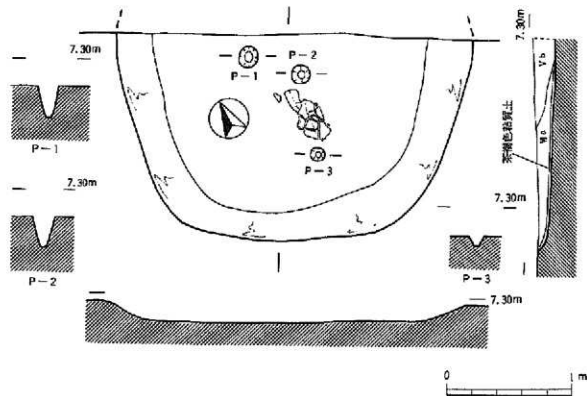
第5図 1トレンチVb層上面遺構検出状況

1号住居址 (第6図)

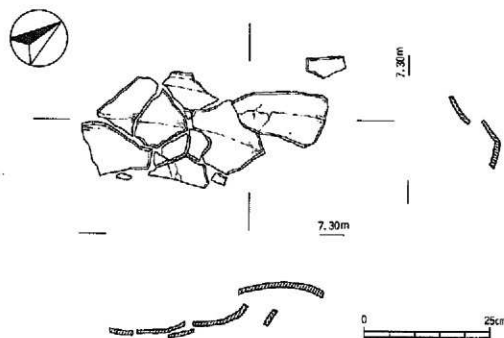
1トレンチB-1区の北壁際で検出された。東側は一部B-2区にまたがる。北側の約3分の1は調査区外のため確認できなかったが、検出面での平面プランは直径約3mの略円形を呈する。遺構はV1b層に掘り込まれている。床面には茶褐色粘質土が薄く堆積し、その上にV1b層よりやや砂質の強いV1a層がみられ、中央部分にはV1b層がレンズ状に溜まるように堆積している。検出面から床面までの深さは約20cmである。床面からは3基のピットが検出された。南寄りの1基は深さ約6cmと浅く、中央付近の2基は深さ約20cmで、柱穴の可能性がある。炉址は検出されなかった。遺構中心付近の床面直上より、完形に近い縄文土器が出土している (V1a層)。

1号住居址出土土物 (第7図, 第8図 1)

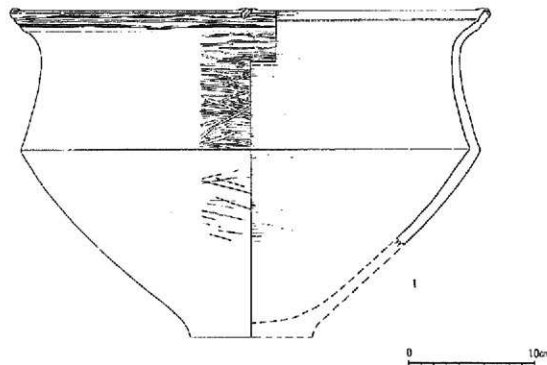
本報告書において試行的に分類した中鉢形土器である (第5節 縄文土器参照)。底部は失われているが、図のように平底になるものと思われる。口径38cm、推定器高26cm、推定底部径9.5cm、胴部最大径36cmを測る。底部からやや広角度で立ち上がり、胴最上段で胴部最大径をもち、そこから弓なりに内湾から外反にむかう頸部が縮き、わずかに内傾した部分を口縁部文様帯としている。口縁部周囲の対角線上に4基のヘラ刻文がみられ、文様帯には3条を基本とする沈線が細く断続的に施される。外面は口縁部から頸部まで横方向の粗いヘラ研磨、胴部以下は粗い斜位のナデ調整痕が観察されるが、胴部以下はヘラ研磨痕が斜落したものと考えられる。内面は口唇部付近に一部研磨痕がみられる以外は、すべて横方向の粗いナデ調整が施される。本厚において縄文時代晩期初頭に位置づけられている、上加世田式土器の範疇に含まれるものである。



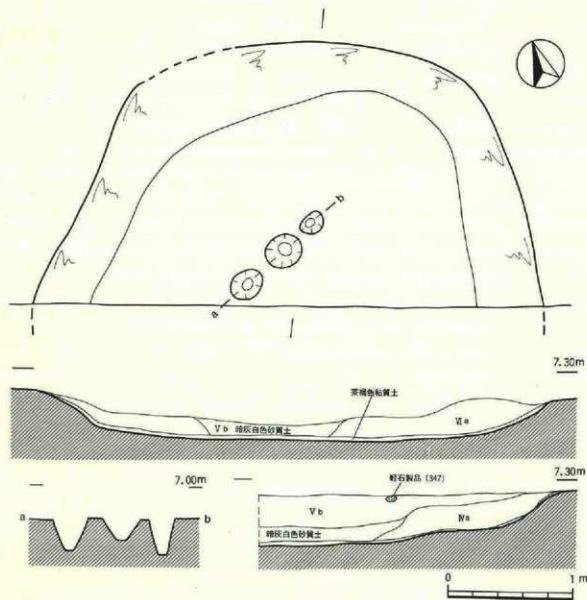
第6図 1号住居址



第7図 1号住居址遺物出土状況



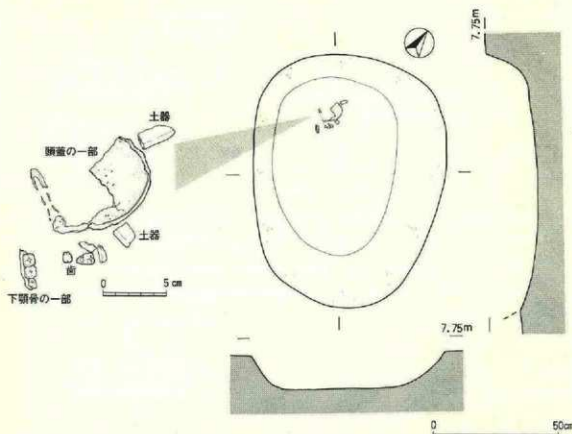
第8図 1号住居址出土遺物



第9図 2号住居址

2号住居址 (第9図)

1トレンチB-1区とB-2区にまたがり、南壁際で検出された。1号住居址とは約60cmの距離で近接する。遺構の南側半分は調査区外のため確認できなかった。検出面での平面プランは直径約4mの略円形を呈し、1号住居址と同じくVb層に掘り込まれている。埋土の堆積状況は1号とはほぼ同様であるが、中央付近のVa層が上部のVb層の影響で若干黒みを帯びる。検出面から床面までの深さは約40cmである。遺構中央付近から3基のピットが並んで検出された。深さは26-30cmである。遺構周辺にはピットや土坑がいくつかみられるが、住居址との関連性は認められなかった。埋土のVa層から遺物は検出されず、炉址も確認できなかったが、形状や埋土の状態から1号と同時期の住居址であると判断した。



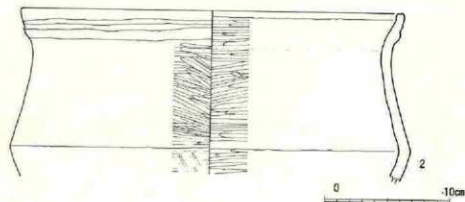
第10図 1号土坟墓

1号土坟墓 (第10図)

1トレンチA-2区の北西隅で検出された。主軸はN40°Wで、検出面において長径100cm、短径78cmの楕円形を呈する。底は長径70cm、短径50cmの楕円形で、ほぼ平坦に作られている。断面は丸みを帯びた逆台形となる。住居址同様Vb層に掘り込まれ、検出面からの深さは約20cmであるが、上部分はかなり削平されていると思われる。埋土はVa層であるが、住居址内埋土と比較してやや黄色味を帯びる。埋土中からは20点の土器片が出土した。遺構北西端の、検出面から約10cmの深さより人骨(頭蓋骨・下顎骨の一部、歯)が発見された。

1号土坟墓出土遺物 (第11図 2)

埋土中から20点の土器片が出土したが、大半が特徴の観察できない小片で接合資料も得られなかったため、1点のみを図化した。口径31cm、胴部最大径32cm、頸部高11cmを測る。第8図の1と比較して、口径に対する頸部高の割合が大きく、胴部から頸部にかけての屈曲角度も浅いなど、中鉢よりも深鉢である要素が強い。胴部最上段で最大径をもち、内傾するほぼ直線的な頸部から蓋やかに外反し、やや厚みを帯びて口縁部文様帯を形成する。口唇部は平坦に調整されている。文様帯にはヘラ状工具によって3条の粗い沈線が施される。内外面ともに横方向の粗いヘラ研磨痕が観察される。縄文時代晩期初頭の上加世式土器である。



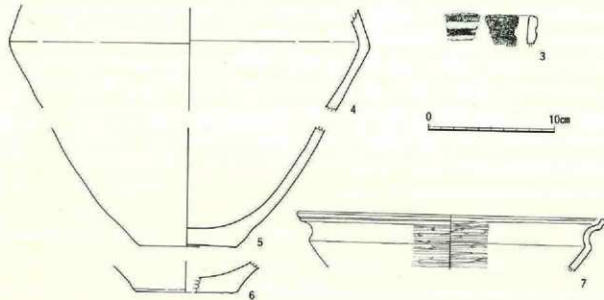
第11図 1号土塚墓出土遺物

2号土塚墓 (第13図)

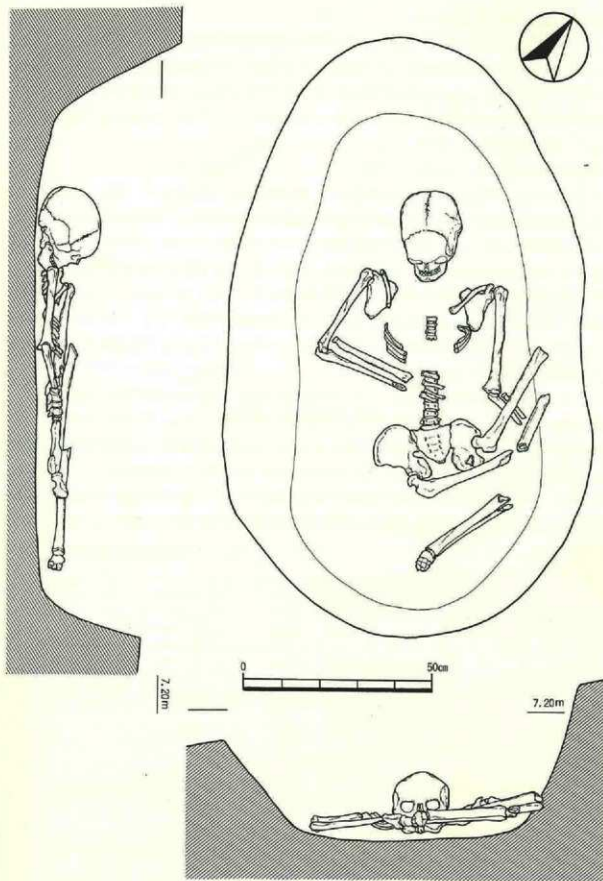
1 トレンチB-2区で検出された。1号住居址の東側約40cm, 2号住居址の北側約45cmに位置する。主軸はN35°Wで、1号土塚墓とほぼ一致する。1号墓と比較して軸方向に長い長楕円形で、検出面において長径160cm, 短径95cmを測り、底は長径130cm, 短径60cmで平坦に作られている。検出面からの深さは約30cmであり、殆ど削平されていないものと思われる。埋土や掘り込みの状態は1号墓と酷似する。遺構の埋土中からは25点の土器片が出土した。また遺槽内からは、頭部が北西を向くほぼ完全な状態の屈葬人骨が検出された。なお人骨についての詳細は、1号墓のものと併せて第V章に記載した。

2号土塚墓出土遺物 (第12図 3~7)

接合資料を含めた25点の出土遺物中、微細な破片を除く5点を図化した。3は口縁部文様帯に数状の凹線文を施す深鉢である。4は胴部から頭部にかけての屈曲角度の深さから中鉢と思われる。外面は粗いヘラ研磨, 内面には横方向の粗いナゲ調整痕がみられる。底部から胴部への立ち上がりの角度から判断すれば5は深鉢, 6は中鉢である。7は浅鉢で、口径24.5cm, 胴部最大径22.5cm, 推定器高約6.5cmを測る。短い口縁部文様帯に1条の粗い沈線を施し、内外面ともに丁寧な横方向のヘラ研磨痕が観察される。浅鉢の形状から考えて、これらは縄文時代晩期初頭のものである。



第12図 2号土塚墓出土遺物



第13図 2号土塚墓

第4節 中・近世の遺構

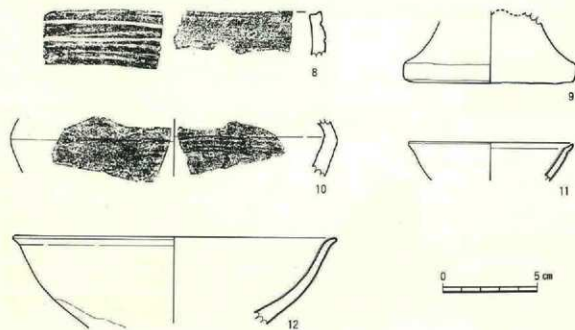
1トレンチA-2区・B-1区及び2トレンチより溝状遺構が検出された。1トレンチのものについては、A-1区部分で連結する同一遺構である(A-1区部分は未調査)。遺構は大部分がVa層上面で検出され、埋土はVb層である。1トレンチ北側のA-2区部分については、遺跡の地形が北側から海岸方向の南側へ向かって緩やかに傾斜しているため、Vb層上面まで削平を受けており、遺構検出面はVb層であった。

溝状遺構1 (第14図 8~11, 第15図)

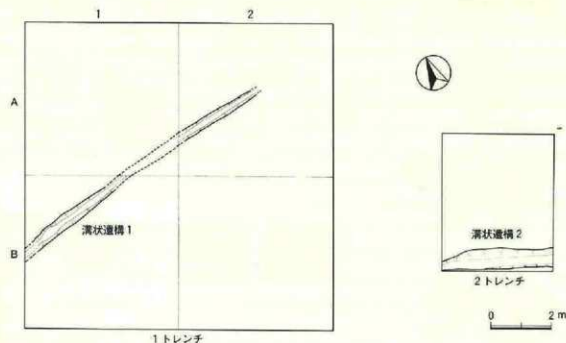
1トレンチA-2区・B-1区で検出された。検出面において長さ約10m、幅30~45cm、深さ3~40cmを測る。遺構はV層上面から掘り込まれ、底面はVb層まで及ぶ。ほぼ東西方向に走り、B-1区では西壁中へ続き、A-2区では削平消滅しているが東側へ伸びていたものと思われる。両区における比高差は約30cmで、東から西へ緩やかに傾斜している。断面は崩れた略方形を呈する。遺構内からは縄文時代の土器片を中心に19点の遺物が出土し、うち4点を図化した。8は縄文時代晩期初頭の深鉢の口縁部、9は弥生土器甕の底部、10は須恵器壺の肩部である。11は口はげの磁器碗で、灰白色の磁胎に乳白色釉をかけ、口縁内側部分のみ釉を掻き落とす。13世紀頃のものである。

溝状遺構2 (第14図 12, 第15図)

2トレンチ南西壁際で検出された。トレンチの壁面に沿って北西から南東方向に向かって走る。V層上面で検出され、埋土はVb層である。検出面における幅70~80cm、深さ25~35cmで、断面は逆台形を呈する。溝の壁面は比較的丁寧に仕上げられている。遺構内からは39点の遺物が出土した。大半は縄文土器の小片であるが、埋土中央付近から12の青磁片1点が採集された。口径17cmを測る碗で、やや粗い灰白色の磁胎に半透明の黄青色釉がかかり、胴下に露胎する部分のみみられる。全体に微細な貫入がはいる。露胎の状態や釉表面の光沢の強さ等から判断して、近世のものと考えられる。



第14図 溝状遺構内出土遺物



第15図 溝状遺構検出状況

第2表 遺構内出土遺物観察表

(S=石瓦, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

検出 番号	遺物 番号	出土区	層	部種	部位	胎土	色		調		器面調整		焼成	備考
							内	外	内	外	内	外		
8	1	B-1	Va	中鉢	口縁 下側	S, C, K	茶褐色	茶褐色	ヨコナデ		粗いヨコナデ研磨	良	1号土壇基	
11	2	A-2	Va	深鉢	口縁	S, C, K	淡赤褐色	暗赤褐色	研磨 ナデ	研磨 ナデ		良	1号土壇基	
	3	B-2	Va	深鉢	口縁	S, C, K	暗茶褐色	明茶褐色	研磨	研磨 ナデ		良	2号土壇基	
12	4	B-2	Va	中鉢	胴	S, C, K	淡褐色	暗茶褐色	ナデ	研磨 ナデ		良	2号土壇基	
	5	B-2	Va	深鉢	底部	S, C, K	淡黄褐色	赤褐色	ナデ	研磨 ナデ		良	2号土壇基	
	6	B-2	Va	深鉢	底部	S, C, K	淡黄褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ		良	2号土壇基	
	7	B-2	Va	浅鉢	口縁	S, C, K	暗黒褐色	淡黒褐色	丁寧な研磨	丁寧な研磨		良	2号土壇基	
14	8	B-1	Vb	深鉢	口縁	S, C, K, R	暗黒褐色	暗黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		良	溝状遺構1	
	9	B-1	Vb	甕	脚	S, C, K, R	淡茶			ナデ		良	溝状遺構1	
	10	B-1	Vb	碗	胴		灰色	灰色	ナデ	丁寧なヨコナデ		良	溝状遺構1	
	11	B-1	Vb	碗	口縁	白色磁胎	灰色	灰色				良	溝状遺構1	
	12	2トレンチ	Vb	碗	口縁	乳白色磁胎	淡黄褐色	淡黄褐色				良	溝状遺構2	

第5節 出土遺物

調査区域全体の表土及びIV、V層から多量の遺物が出土した。出土状況としては、100m未満の調査面積から、小片のため一括採集したものを含め約6000点以上の遺物が極めて密集した状態で検出された。土器については、縄文時代前期から弥生時代中期、古代の須恵器まで、層位に関係なく混在して出土しているが、主体となるものはV層を中心とした縄文時代晩期の土器である。

調査は住宅建設予定地の規模にあわせてトレンチを設定して行ったため、1・2トレンチの間隔は3.5mと近接している。そのため、ここでは1・2トレンチ出土遺物を分けて記載せず、一括して取り扱った。また前述したように、遺物は層位によって時期差を捉えることが困難であるため、出土した層位に係わらず形態や器種による分類に従って記述した。

1 縄文土器 (第16図 13~24)

I~Ⅲのタイプに分類した。I~Ⅲ類は、割合としては出土土器全体の10%に満たない。そのためI~Ⅲ類については、文様や器形の特徴を一つの土器形式としてとらえた分類を行った。深鉢・浅鉢といった器形ごとの面体数が比較のままとなっているI~Ⅲ類については、各器形ごとに類別した。また各タイプにおける細部形態の変化をa、bとして細分を載めた。

I類 (第16図 13~15)

それぞれ貝殻痕跡による調整痕が観察される。13は口縁部周辺に刻みのある突帯文と幾何学的沈線文、口唇部に短く連続する凹線が施される。14・15は貝殻痕跡による押点文が胴部外面にみられ、いずれも表面は磨耗している。縄文時代前期の土器である。

Ⅱ類 (第16図 16・17)

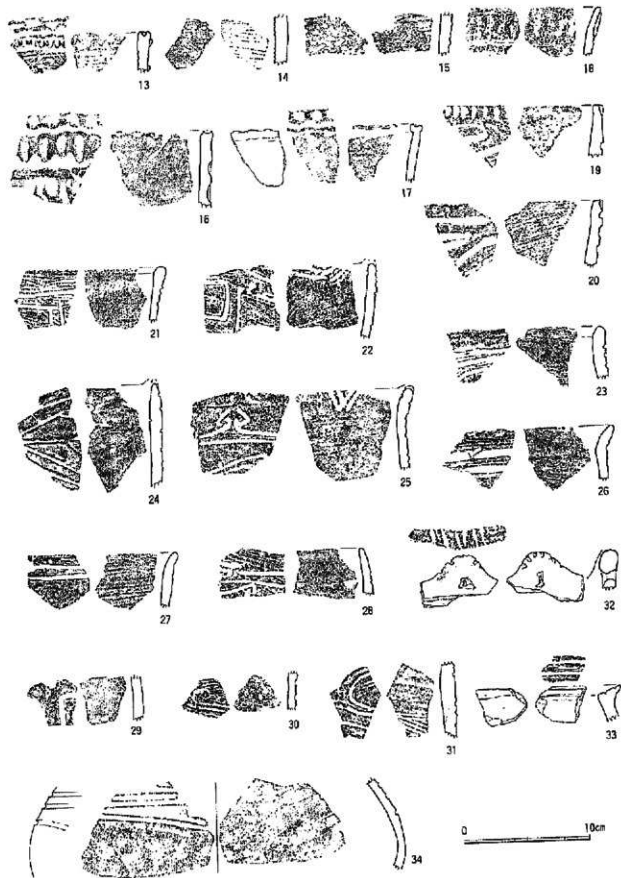
16は口唇部に連続する押点文が施されて波状を呈し、口縁部外側に低い縦位の凹線文と押点文が交互に施文される。17は口唇部の押点文は16と類似するが、口縁部から胴部にかけては無文と思われる。

Ⅲa類 (第16図 18~20)

口縁部外側に横位の短線文と、その下側に直線的もしくは曲線的な凹線文が施されるものである。内面は貝殻痕跡による横位の調整痕がみられる。

Ⅲb類 (第16図 21~34)

口縁部外側から胴部にかけて、直線的もしくは曲線的な凹線文が施される点においてⅢa類と共通するが、器形と文様のバリエーションが豊富である。基本的な器形は深鉢(21~23)と甕(24)であるが、口縁部については、直行するもの(21~24)・外反するもの(25~27)・内弯するもの(28)がみられる。文様については二本の平行凹線(沈線)文を基調として、直線の方形を描くもの(21・22・29)、鉤手状つなぎ文をもつもの(25・28)、直線と曲線の組み合わせと思われるもの(23・30・31)、幾何学的直線主体のもの(24)、太目の凹線文が施されるもの(26・34)など多様性が窺える。また口縁部が微妙な波状を呈するもの(22・24・25)は、その頂部内面に文様が施される。32は口縁部に付けられた環状山形突起で、頂部に凹線による刻みをもつ。33はくの字に外反した口縁部の内面に二条の沈線文を施すものである。いずれも小片のため、その全容は明確にできなかった。



第16図 出土遺物実測図1 (I~Ⅲ類土器)

IV類 (第17図 35~48)

口縁部が断面三角形を呈し、貝殻腹縁による器面調整や爪形文・凹線文・貝殻刺突文の組み合わせが特徴的な一群である。38は方形をなす口縁部の四隅の一つである。46・47は台付皿の一部で、46は口縁部四隅に付けられた突起部分、47は脚部である。48は大きく外反した深鉢の口縁部に取り付けられた装飾突起である。

V類 (第17図 49~54)

やや肥厚する口縁部はIV類ほど顕著ではないが、貝殻腹縁による調整痕や貝殻刺突文にIV類との類似性がみられる。なだらかに波状を呈する口縁(49)や、斜位に長く施される貝殻刺突文(49・50・52)に代表される一群である。53は口唇部に沈線と細かな押点か施文される。

VI類 (第17図 55)

内弯する分厚い口縁部に、押点間を連結する沈線文が施される。一点のみの出土であった。

VII類 (第18図 56~58)

膨らむ胴部から、緩やかに締めつつ口縁に向かって開く器形の深鉢である。56は口縁部が内弯する。沈線(凹線)間を縄文もしくは貝殻腹縁による疑似縄文で充填させる磨消縄文系土器に属する一群である。58は押点間を連結するような直線の沈線文がみられる。

VIII類 (第18図 59~67)

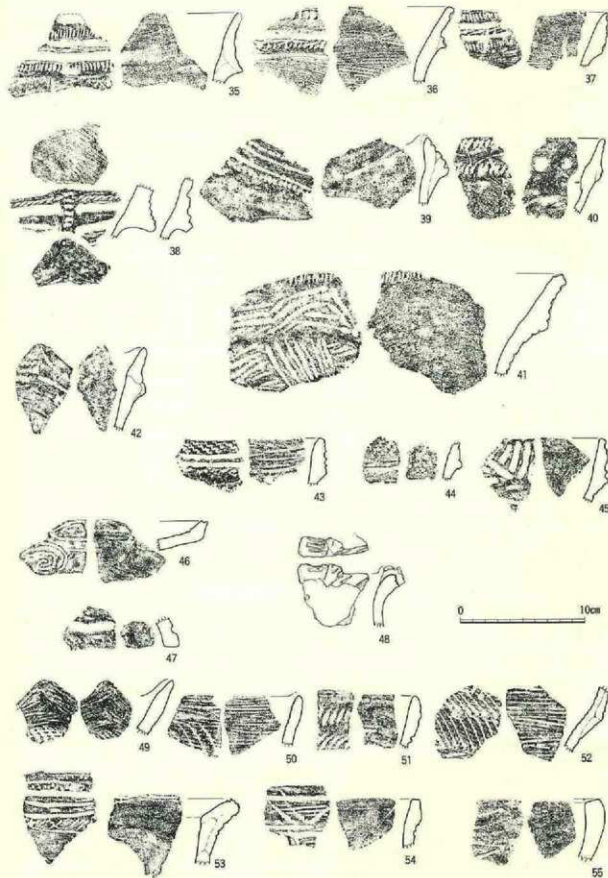
V類と同じく磨消縄文系土器である。膨らむ胴部から直線的に外反する頸部が特徴で、口縁部に数条の沈線をもつもの(59~61)と、波状を呈する口縁に沈線と縄文が施されるもの(62)がある。胴部の文様帯には、押点文や沈線間を埋める縄文等が観察される。器面は内外とも丁寧に研磨されるものが多い。

中期~後期中葉土器の底部 (第18図 68~80)

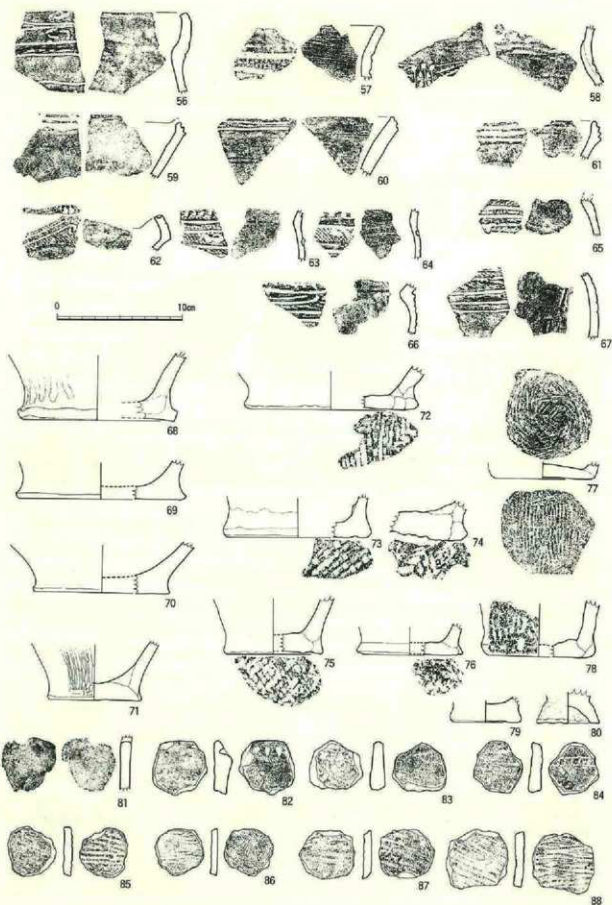
68は裾部が大きく張り出しヘラ状工具による掻き上げ痕を残すもので、胎土に滑石を多く含む中期の土器である。69~80は後期の土器と思われ、裾部が張り出し気味のもの(69~76)とはほぼ真っ直ぐに立ち上がっていくもの(77~79)に大別される。72~76は底外面に網代痕をもつ。77・78は器面に貝殻調整痕をもつIV~V類土器の底部である。特に77は底内面には右回り、外面には直線的な調整痕が明瞭に観察できる。80は手捏ね風上げ底の脚部である。

土製円盤状加工品 (第18図 81~88)

土器片を円形に加工したもので、通常メンコと呼称される。確認されたのは8点のみで、81は意図的な加工ではない可能性がある。面取り仕上げの施されたものはない。81は補修孔がみられ、82は口縁部、83~88は胴部片を利用している。85~88は内外面に貝殻調整痕が観察される。すべて後期貝殻文系土器の破片と思われる。



第17図 出土遺物実測図2 (IV~VI類土器)



第18図 出土遺物実測図3 (Ⅵ・Ⅶ期・中～後期土器底部・土質円盤状加工品)

Ⅷ類 (第19図～第21図 89～162)

I～Ⅵ類以外の深鉢を総括してⅧ類とし、以下形態的特徴によって細分した。

Ⅷa類 (第19図 89～107)

胴部最上段から頸部が写りに外反するものなかで、口縁部が内傾・内弯し、その部分に1～2条の沈線もしくは凹線文を施す。口縁部断面形にはいくつかのバリエーションがみられ、直線的な長方形を呈するもの(89～93)、口唇部が尖り三角形を呈するもの(100・102)、文様帯部分の内面を括るように調整が施されるもの(104・105・107)などがある。

Ⅷb類 (第19図・第20図 108～134)

直立もしくはやや外傾する口縁部文様帯に、2～5条の沈線(凹線)文を施す。頸部以下の形状については、a類とほぼ同様であると思われる。口縁部文様帯と頸部との境界が明確に張り出すもの(108～124)、文様帯と頸部が比較的なだらかに接続するもの(125～135)があり、施文具の太さや施文の状態等でさらに細分は可能である。

Ⅷc類 (第21図 135～142)

やや外傾する口縁部文様帯に2～5条の沈線(凹線)文を施す。頸部最上段の屈曲部分から、ほぼそのままの角度で口縁部文様帯が接続する点がa・b類と異なる。

Ⅷd類 (第21図 143～151)

Ⅷb類の口縁部文様帯が無文となる土器群である。147は口縁部がわずかに内傾するようであるが、本類に含めておく。

Ⅷe類 (第21図 152・153)

胴～頸部の屈曲部分である。屈曲部直上に沈線(152は1条、153は2条)がみられるものは、この2点のみであった。ⅧaもしくはⅧb類の口縁部に接合すると思われるが、詳細は不明である。沈線のない同形態の胴部片は多数出土したが、口縁部との関係が明確にできなかったため図化は行わなかった。

Ⅷf類 (第21図 154～162)

口縁部文様帯をもたない深鉢で、胴(頸)部から口縁部にかけてほぼ真直ぐに開くものと、わずかに外反するものがある。内外ともに丁寧な研磨を施す(162は剥落している)。154～161については胴～頸部の状態は不明であるが、162と同様にやや影らむか、もしくはⅧa～Ⅷe類のように屈曲することが想定される。

X類 (第8図 1, 第22図・第23図 163～188)

一般的に鉢形もしくは浅鉢形土器に分類されるものである。本報告書においては試案的に、深鉢と浅鉢の中間的要素をもつ土器という意味で「中鉢」として取り扱いたい。今回の調査においては大半が口縁部だけの破片であるため、完形に近い1及び163を基本資料として分類を試みた。本遺跡における分類上の基準は以下のとおりである。

- 1) 口径と器高の比率は、概略1:1～2:1の範囲内である(1は3:2, 163は5:4)。
- 2) 口縁部周囲に4基を基本とする押点文があるもの(163・171・175・177)や波状を呈するもの(167・168)がみられる。
- 3) 口縁部文様帯に2条の沈線をもち深鉢の様相を呈するもの(163～169)、1条の沈線をもつ玉縁状の口縁が浅鉢の様相を呈するもの(171～188)に大別される。

- 4) 口縁部内側には浅鉢にみられるような段ができる。
- 5) 器高に対する頸部高の割合が、深鉢と比較してやや小さい。
- 6) 底部は平底もしくは若干の上げ底で、立上がり部分は丸みを帯びない鋭角的なものが多く、深鉢と比較して広角度で上がっていく。

Ⅱ類 (第23図 189-207)

Ⅱ・Ⅴ類の底部である。平底のもの (189-198)、若干上げ底気味のもの (199-200)、上げ底を意識したもの (202-207) に概略分類できる。胴部に向けての立ち上がりが比較的急角度なものの (194-199、202-207) はⅤ類、その他はⅡ類の底部と思われる。

Ⅲ類 (第24図・第25図 208-233)

浅鉢形土器を総括してⅢ類とし、口縁部と頸部の形態で細分した。

Ⅲa類 (第24図 208-214)

胴部最上段から弓なりに外反する短い頸部の先端に、直行もしくは外傾する薄い板状口縁を貼りつけるもので、口縁部外側に0-1条の沈線が施される。口径の大小にも幅がみられる。

Ⅲb類 (第24図 215-221)

Ⅲa類の口縁部が玉縁状を呈する。押点によって口縁部に突起が生じるもの (215・216・221) がみられる。

Ⅲc類 (第25図 222-226)

胴部最上段から弓なりに外反する頸部が、a・b類と比較してやや長く伸びる。口縁部の構成は平坦な板状のもの (222・223)、玉縁状のもの (224)、鋭角なもの (225・226) などがある。a・bとd類の中間的イメージをもつ。

Ⅲd類 (第25図 227-229)

胴部最上段から短い弓なり部分を経て直線的に長く外傾する頸部をもち、口縁部は直立して玉縁状を呈する。その結果口縁部外周には1条の凹線が巡る。

Ⅲe類 (第25図 230)

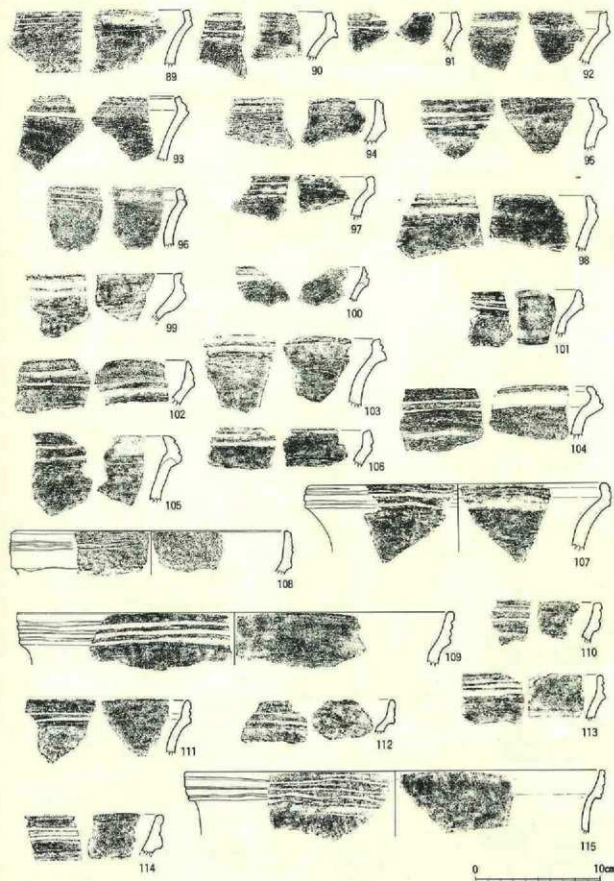
胴部最上段から緩やかに弓なり外反する頸部へと続く器形をなし、口縁部文様帯をもたない。胴部以下の傾斜によっては中鉢である可能性もある。1点のみ確認された。

Ⅲf類 (第25図 231)

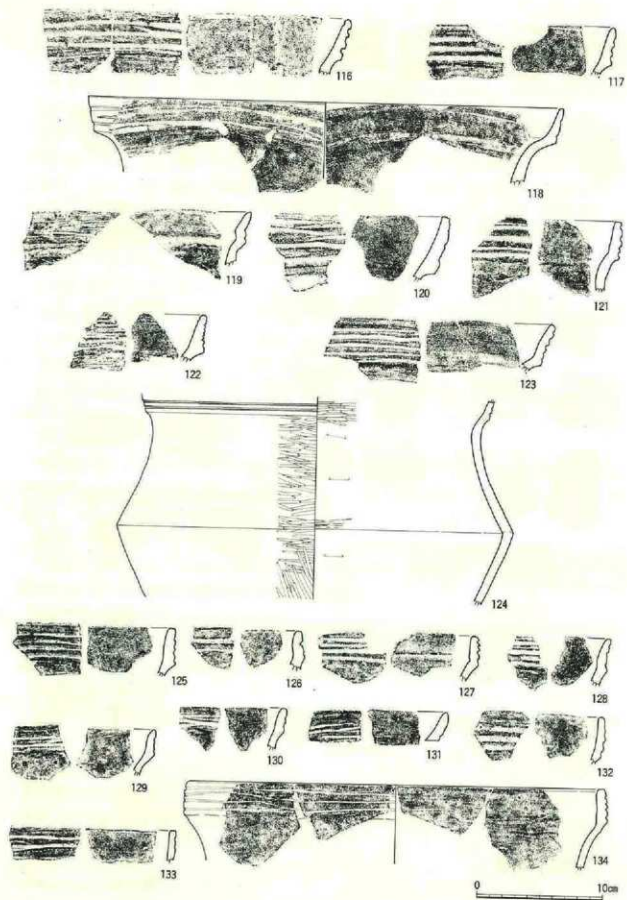
ソロバン状に影らむ胴部から、急激に屈曲外傾する頸部へと続く器形をなす。確認できたのは1点のみであった。

Ⅲg類 (第25図 232・233)

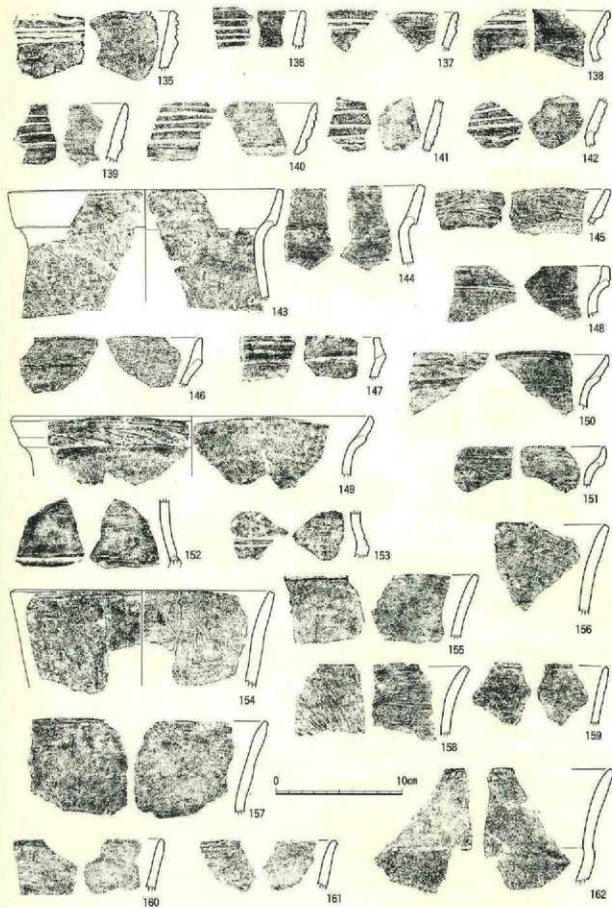
胴部最上段から極端に短い頸部を経て、外傾する短い口縁部になる。他のタイプと比較して小型のものが多いと思われる。233は丸底をなす底部で、他のⅢ類の小型のものと接合する可能性もあるが、ここでは本類に含めておく。



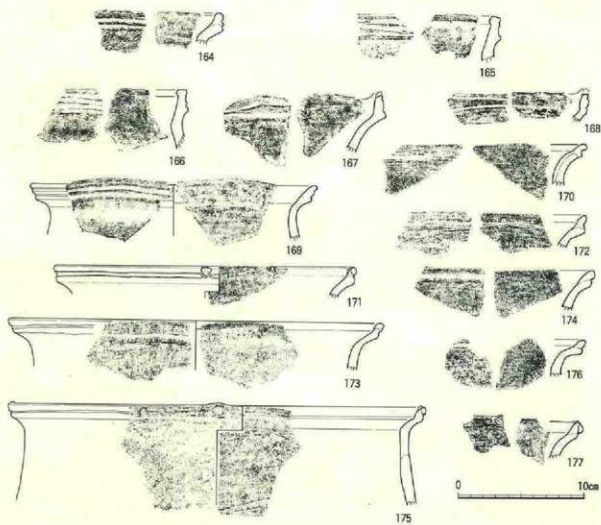
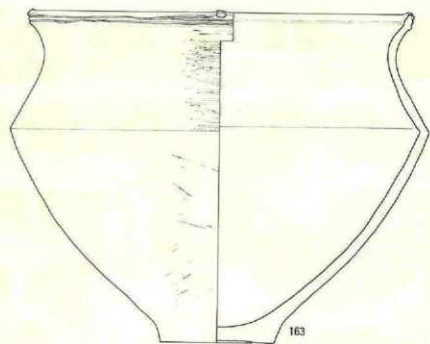
第19図 出土遺物実測図4 (Ⅲa・Ⅲb類土器)



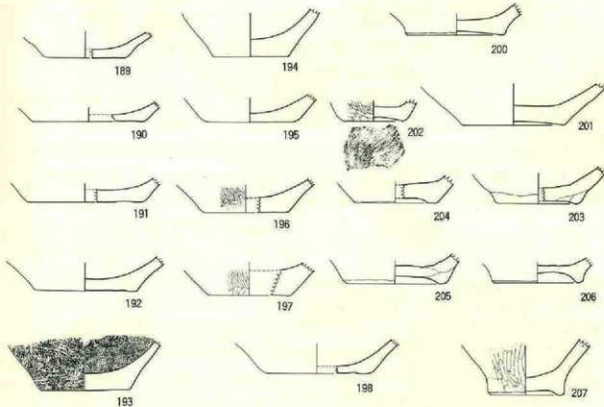
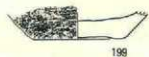
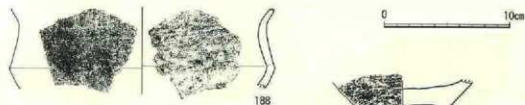
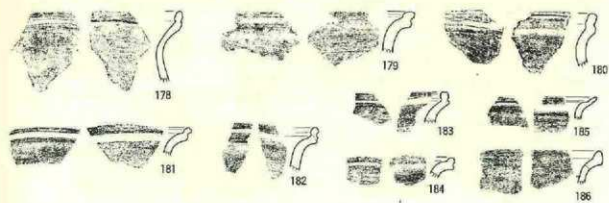
第20图 出土物实测图5 (IXb 類土器)



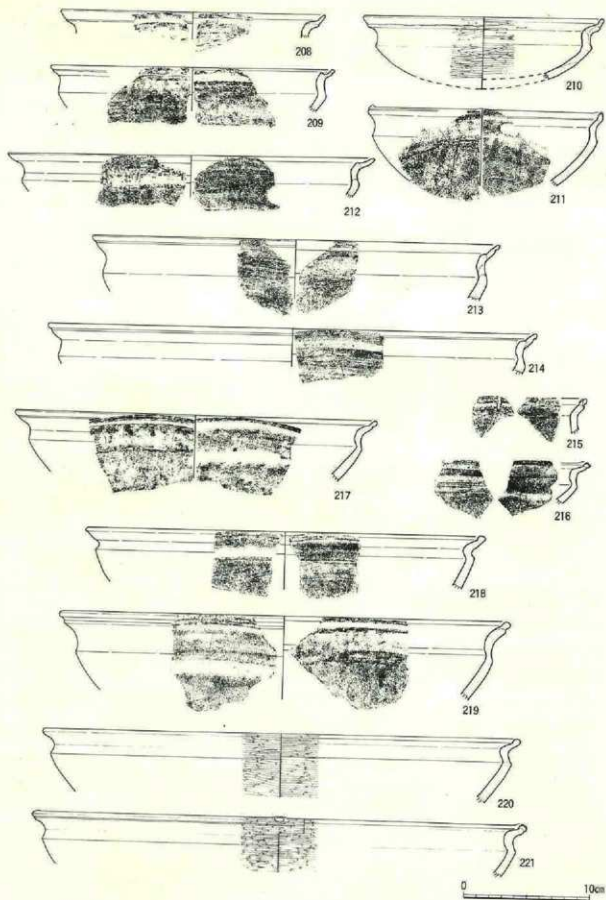
第21图 出土物实测图6 (IXc~IXf 類土器)



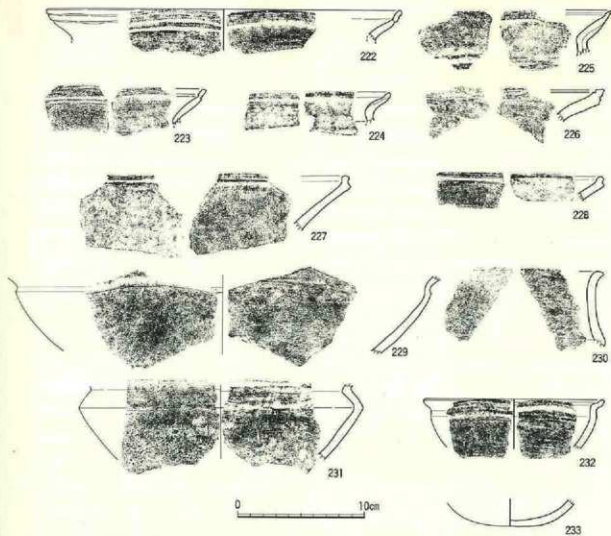
第22图 出土遗物实测图7 (X類土器)



第23图 出土遗物实测图8 (X·XI類土器)



第24図 出土遺物実測図9 (Xia・Xib類土器)



第25図 出土遺物実測図10 (Xic~XiG類土器)

Ⅻ類 (第26図 234~242)

器形が特殊なものや、他のタイプと様相が異なるものを一括して分類した。

Ⅻa類 (第26図 234~236)

小型の鉢形土器である。短く外反する口縁部をもち、丸みを帯びた碗形の胴部となる。Ⅻ類土器を意識したミニチュアと思われ、祭祀的要素が強い。234・235は口縁内面の接合部分に沈線が施される。これらは同一固体の可能性もある。

Ⅻb類 (第26図 237・238)

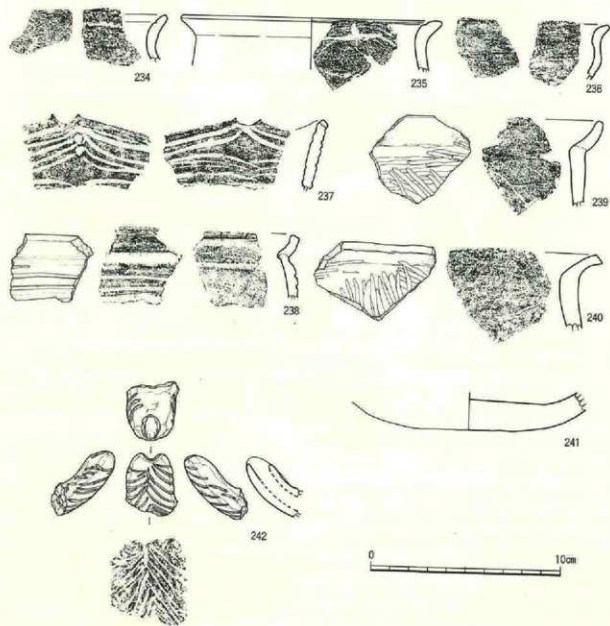
237は浅鉢、238は鉢形土器の口縁部であり、ともに内外面に丁寧な研磨を施す精製土器である。237は全体の器形は不明であるが、口縁部以下はⅫa~c類と同様の形態をもつことが想定される。波状を呈する口縁の頂上部分に、押圧による角状突起を形成する。外面には波状頂部直下に2つの押点を起点とする4本単位の沈線重弧文を施し、内面にも同形態の沈線がみられる。238は中位に最大径をもつ湾曲した胴部上端に、やや内湾しつつ外傾する口縁が取り付けられる。胴部の文様の全体像は不明であるが、237と同様の沈線重弧文であると思われる。

Ⅷc類 (第26図 239-241)

正確な器形は不明であるが、頸部から胴部にかけて緩やかに膨らみ、底部は丸底気味の平底(241)になると思われる。口縁部は短く外傾するが、239は内弯、240は若干弓なりに外反する。器面調整はともに粗い研磨である。分類上、甕形土器と呼称しておく。

Ⅷd類 (第26図 242)

注口土器の注口部であり、接合する本体部分は確認できなかった。横幅が広く、偏平な印象を受ける。角度は不正確であるが、注口腹部に施された矢羽状沈線文が正面から視覚可能な傾きであると想定される。



第26図 出土遺物実測図11 (Ⅷa-Ⅷd類土器)

2 弥生土器 (第28図 243-260)

Ⅳ-Ⅴ層にかけ、縄文土器の中に混入する状態で出土する。確認されたものの総数は、出土土器全体の1%に満たない。243-259は甕、260・265は壺の破片である。甕にはL字に外反屈折する口縁部が垂れ下がり気味のもの(243-245)、ほぼ水平のもの(246-249)、若干上向くもの(254)がみられる。243は大型で他とは様相が異なり、口縁部先端に器面調整具と同じ工具で左下がりの刻みを施す。これら甕・壺の胴部には1-数条の三角形貼付突帯をもつものが多いが、245・250-253と比較して、255-260はやや鋭角な印象を受ける。250は下位の三角形貼付突帯が一周せずに右端部分が左下方へと伸びるが、破片のため細部は不明である。257-259は甕の底部で、充実した脚台である。257は縦方向のヘラミガキ痕がみられ、やや上げ底となる。258には明瞭なハケ目が観察される。

3 須恵器 (第28図 261-263)

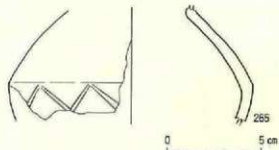
出土状況は弥生土器と同様である。261は内外面に工具ナデ痕をもつ壺である。262は内面に平行タタキ、外面に格子状タタキ痕をもち、263は内面に平行タタキ、外面に同心円タタキ痕をもつ。ともに甕である。これらは奈良・平安期のものと思われる。

4 滑石製石鍋 (第28図 264)

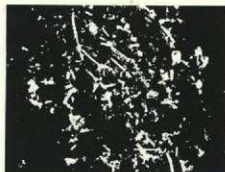
表土中出土の口縁部破片である。表面は磨耗し、後世の擦痕も多く、調整や形状の把握はできなかった。

5 鋸歯文を有する壺形土器 (第27図 265)

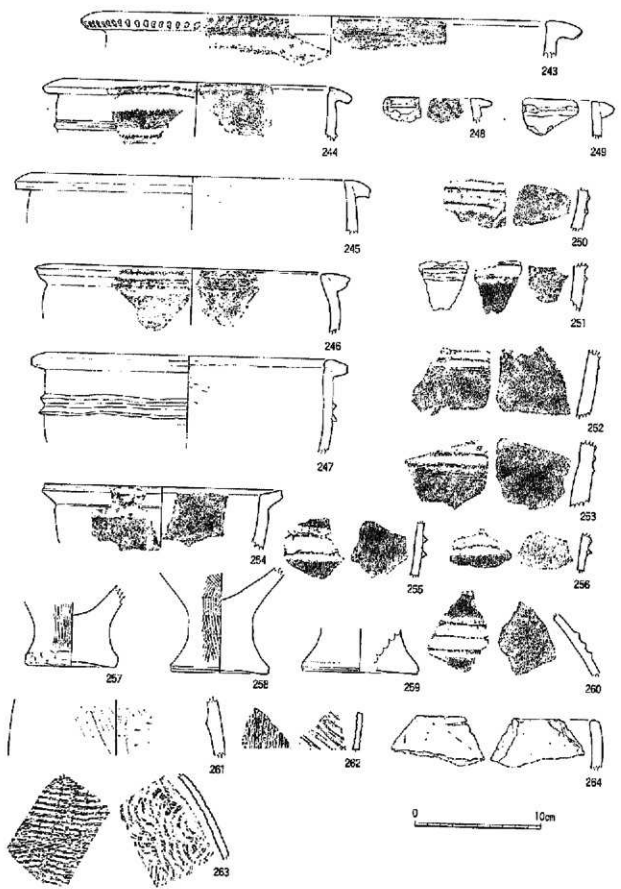
調査区に隣接する畑の表土中より採集したものである。若干磨耗しているが、表面には赤色顔料が部分的に残存しており、かつては器面全体に塗布されていたと想定される。器形の細部については不明であるが、胴部中央付近に最大径をもち、その部分に稜ができ、丸みを帯びたソロバン状を呈する。頸部でやや縮まり、口縁部はわずかに外反する壺形土器と思われる。胴部の稜直下に、2条の平行ヘラ描き細線で鋸歯文が刻まれる。線は連続せず、粗い印象を受ける。なお、電子顕微鏡により赤色顔料を観察した結果パイプ状の粒子が認められ、X線による成分分析ではFeの顕著なピークがみられた。これらのことから、赤色顔料は酸化鉄を主原料とするベンガラであることが確認された。



第27図 鋸歯文を有する壺形土器



パイプ状粒子



第28回 出土遺物実測図12 (弥生土器・須臾器・石鏡)

第3表 出土土器観察表(1)

(S=白土, C=粘土, K=角閃石, 小=小石, U=土器)

回次	遺物名	出土区	層	器種	部位	土色	色		目	耳	内	外	備考
							内	外					
13	B-1	Vb	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
14	B-2	Vb	漆器	柄	S, C, K	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色					片断
15	2トレンチ	Va	漆器	柄	S, C, K, R	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色					片断
16	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
17	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
18	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
19	B-2	Vb	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
20	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
21	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
22	2トレンチ	Vb	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
23	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色					片断
24	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
25	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
26	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色					片断
27	2トレンチ	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
28	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
29	B-1	Va	漆器	柄	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
30	B-2	Vb	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
31	2トレンチ	Va	漆器	柄	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
32	2トレンチ	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
33	B-2	Vb	漆器	口縁	S, C, K	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色					片断
34	B-1	Va	漆器	柄	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
35	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
36	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
37	2トレンチ	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
38	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
39	B-1	Vb	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
40	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
41	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
42	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
43	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
44	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
45	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
46	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
47	B-2	Vb	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
48	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
49	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
50	A-2	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
51	B-2	Vb	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
52	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
53	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
54	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
55	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
56	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
57	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
58	B-1	Va	漆器	柄	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
59	B-2	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
60	D-2	Va	漆器	口縁	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
61	2トレンチ	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
62	B-1	Va	漆器	口縁	S, C, K, R	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断
63	B-1	Vb	漆器	柄	S, C, K	赤褐色	赤褐色	赤褐色					片断

6 石器 (第29図~第39図 266~347)

石器と同じくV層を中心に出土した。縄文~古代の土器に伴い、層位的・形態的な時代区分は困難であるため、出土したトレンチ・層位にかかわらず器種による分類・記述を行った。

石鏃 (第29図 266~270)

6点の出土中5点を図化した。石材は頁岩(266・267)、黒曜石(268・269)、チャート(270)からなる。形態としては、凹基無茎鏃(266~268)、挟りが浅いもの(266)、挟りが比較的深いもの(268)がある。269・270は石鏃としては定形化が不十分であるが、緑泥の調整痕から凹基鏃と判断した。269は楔形石器の可能性もある。

楔形石器 (第29図 271)

1点のみの出土で、石材は気泡が殆どみられない黒曜石である。上下両端からの敲打調整痕がみられ、断面はレンズ状を呈する。刃部は使用により一部欠損している。

石鏃 (第29図 272)

1点のみの出土で、石材は気泡が少ない黒曜石である。図の左下挟り部分に調整痕がみられるが先端部に明瞭な使用痕は認められなかった。

スクレイパー (第29図 273)

1点のみの出土で、石材は気泡が殆どみられない黒曜石である。図の下方に刃部調整が施されているが、他縁に対し斜めになっているため、二次加工後スクレイパーとして再利用したものと思われる。

石匙 (第29図 274)

1点のみの出土で、石材は頁岩である。上部両端から挟りを施し、ほぼ左右対象になるよう調整されている。

石製円盤状加工品 (第29図 275)

石材は砂岩である。海林メンコとよばれ、土器を利用したものは破点出土しているが、石製のものは1点のみであった。表面および周辺部域にいたるまで丁寧な研磨調整が施されている。

石鏃 (第30図 276・277)

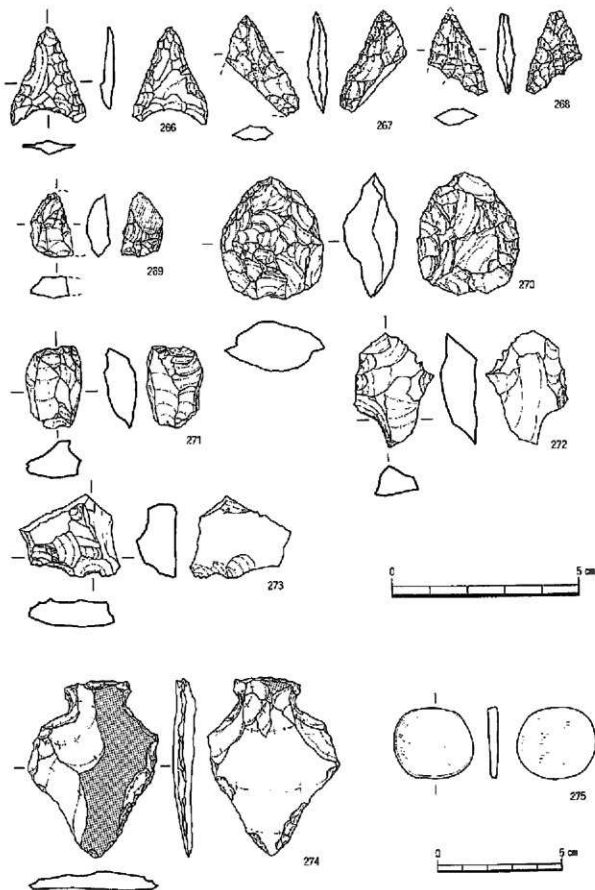
石材はいずれも粘板岩である。276は風状を呈する背部に研削調整痕、下方の刃部には使用痕と思われる磨耗がみられる。277は使用痕は観察できなかったが、敲打調整による刃部成形を施している。

石棒状未製品 (第30図 278)

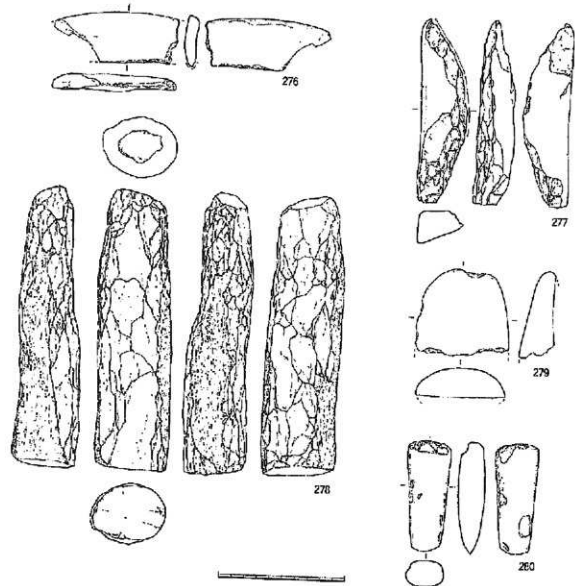
石材はやや砂質の粘板岩である。上部は自然面で、下部は切削されている。図面上の両側面に敲打調整痕が明瞭に観察され、石棒もしくは石斧の未製品と思われる。

磨製石斧 (第30図 279・280)

2点のみ確認されたが、280は表土中の出土である。279は粘板岩製で、刃部を含め半分以上が欠損した破片であるが、表面は丁寧に研磨されている。280は砂岩からなるノミ状の石斧で、全体的に入念に研磨されているが、側縁部に一部敲打調整痕が残っている。上部には垂直な力がかえられた痕跡がみられる。



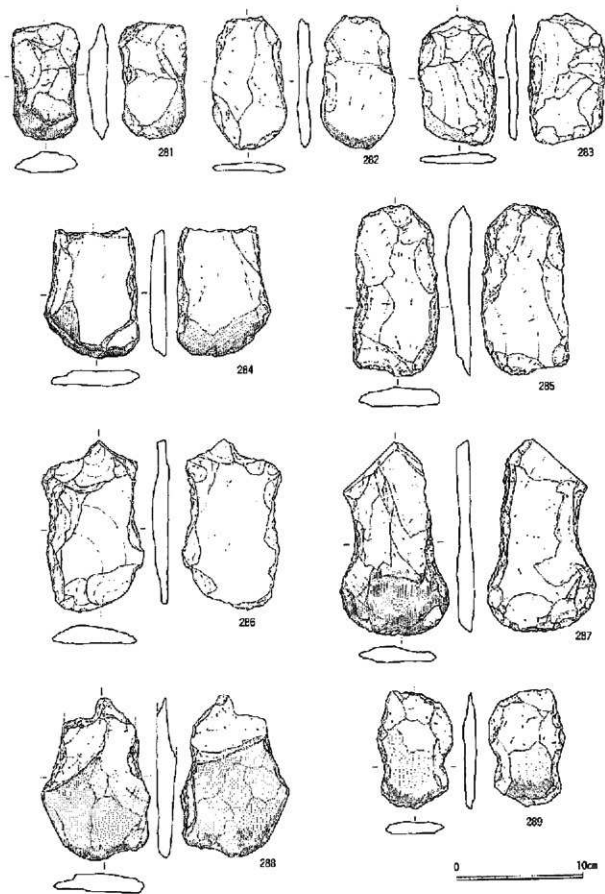
第29図 出土遺物実測図13 (石鏃・楔形石器・石鏃・スクレイパー)
石匙・石製円盤状加工品



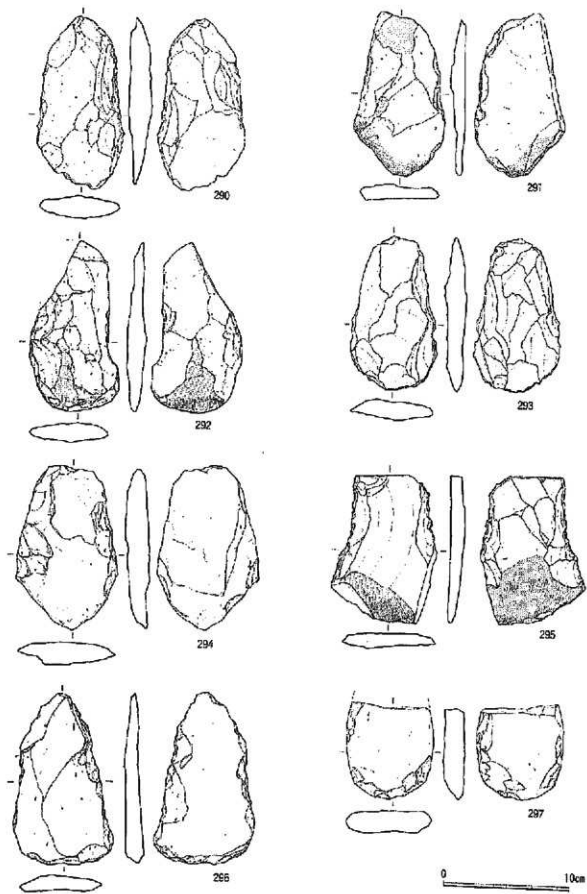
第30図 出土遺物実測図14 (石斧・石棒状未製品・磨製石斧)

打製石斧 (第31図～第33図 281～302)

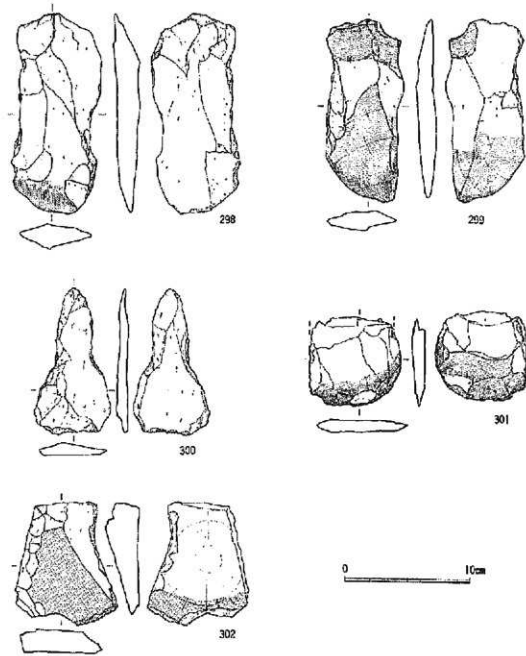
破片を含めて41点出土し、21点を図化した。形態的にはいわゆる標準打製石斧とよばれるものである。一般的な分類法に従えば、短冊型に近いもの (281～286・290・292・294・295・297～300)、分鐮型に近いもの (287～289)、概ね撥型を呈するもの (291・293・296・300・302) とに概略分けられる。形態的相違はあるが、ほとんどのものが基部付近の両副縁に抉りもしくは敲打調整痕をもち、着柄を意図していると思われる。石器の軸と使用痕の方向が異なるもの (289・295・299・301) がみられるが、これは錨と弧のように使用法の相違もしくは破損したものに再調整を加えたと考えられる。石材は大部分が粘板岩と頁岩で、302が安山岩である。なお使用による磨耗が顕著な部分については、スクリーン・トーンにより表現した。



第31図 出土遺物実測図15 (打製石斧1)



第32図 出土遺物実測図16 (打製石斧2)



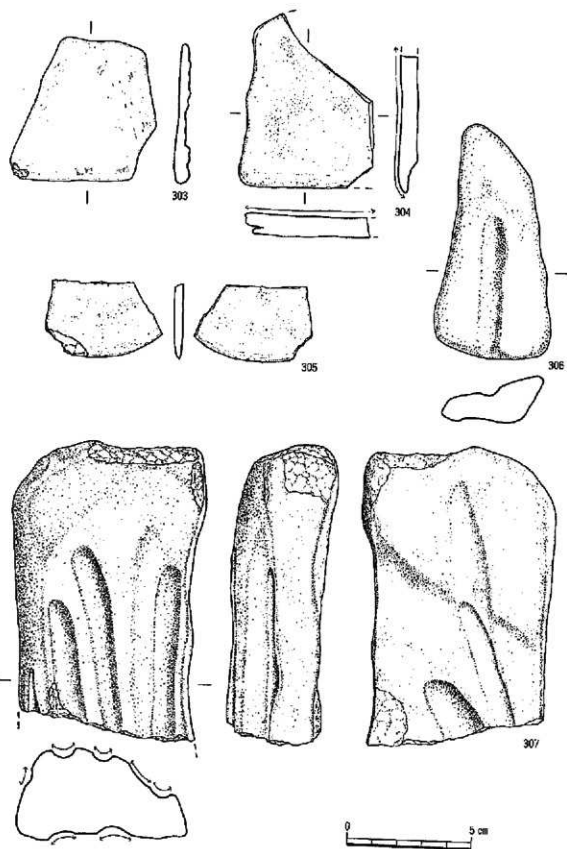
第33図 出土遺物実測図17 (打製石斧3)

擦り切り石器 (第34図 303-305)

303・304は砥石に類似する。石材は303が凝灰質砂岩、304・305がワッケタイプの極粗粒砂岩である。

有溝砥石 (第34図 306・307)

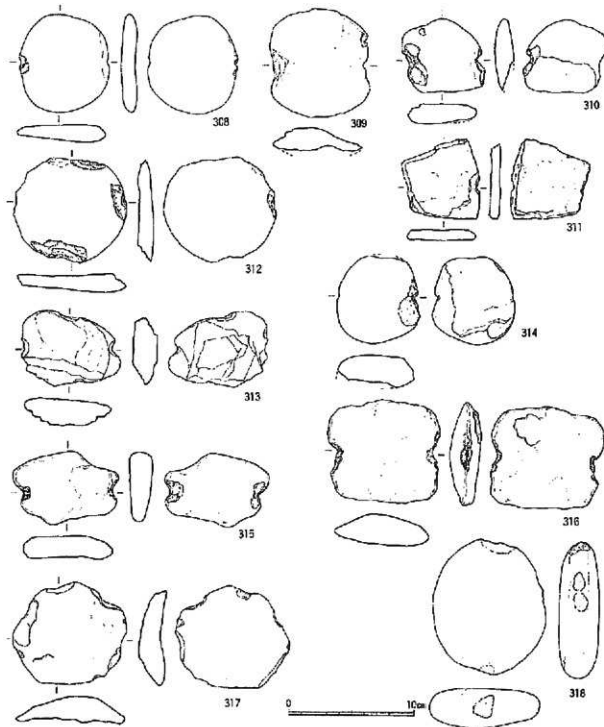
石材は2点とも中～細粒の砂岩で、アレナイト質である。306は1条、307は表裏側面あわせて最低でも9条の溝が確認できる。溝の幅は306が0.9cm、307が0.8～1.5cmである。これらのタイプは攻玉用あるいは矢柄研磨用と考えられているが、今回の調査では玉の類は検出されていない。



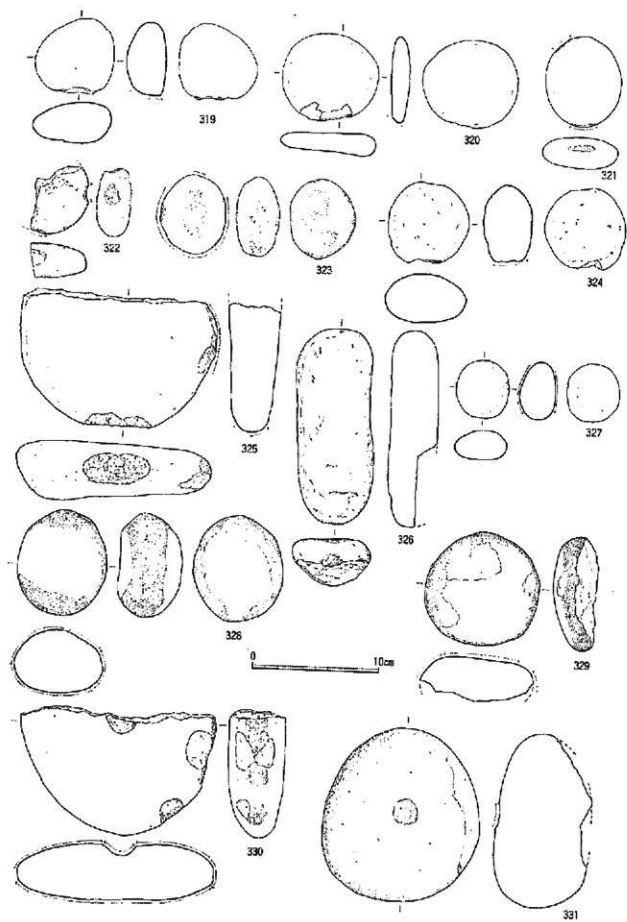
第34図 出土遺物実測図18 (楡り切り石器・有溝砥石)

石 錘 (第35図 308-318)

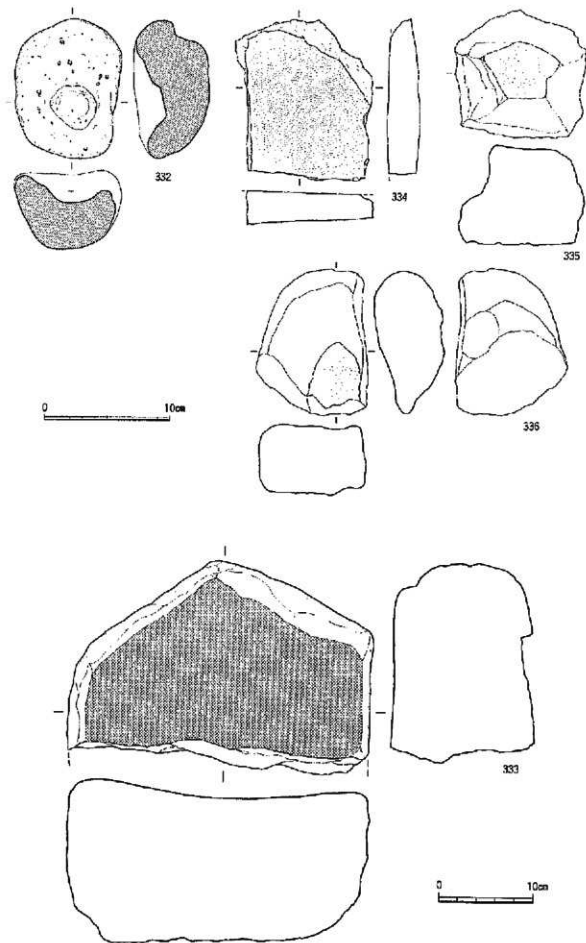
14点の出土のうち11点を図化した。粘板岩・頁岩を利用したもの (308-313) が多く、安山岩製のもの (316-318) や斑基岩性緑色岩製のもの (314・315) もみられる。調整法はすべて打ち欠き挟りで、二側縁挟入が8点 (308-311, 314-316)、三側縁挟入が318の1点、四側縁挟入が3点 (312・313・317) である。形状は概ね円形 (308・309・312・314・317・318) と方形 (310・311・313・315・316) に分けられる。



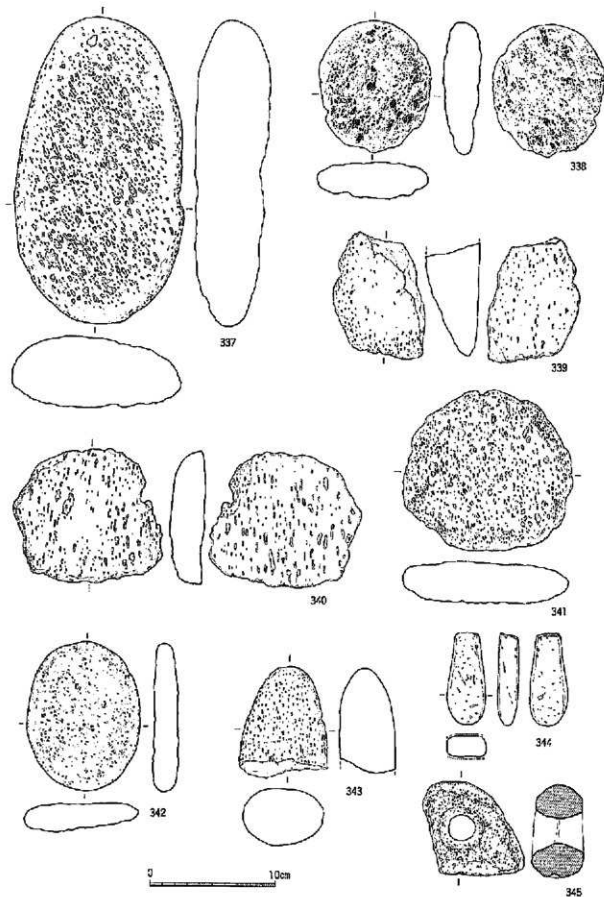
第35図 出土遺物実測図19 (石錘)



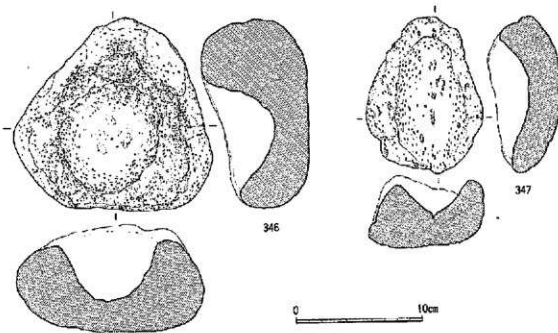
第36图 出土遗物实例图20 (磨石·敲石·凹石)



第37图 出土遗物实例图21 (石皿)



第36図 出土遺物実測図22 (軽石製品 1)



第39図 出土遺物実測図23 (軽石製品 2)

磨石・敲石 (第36図 319-329)

48点の出土のうち11点を図化した。敲打痕のみ部分的にみられるもの(319-326)、磨面のみをもつもの(327)、平坦部に凹面、周縁部に顕著な敲打痕をもつもの(328・329)に分類される。石材は砂岩(319-321)、凝灰岩(322・323)、安山岩(324・325・329)、はんい岩(326)、花崗岩(327)、粘板岩(329)と多様である。

凹石 (第36図 330-331, 第37図 332)

すべて安山岩を利用している。330は夾平坦部に凹面、周縁部の一部に敲打痕をもつ。332は他とは縁相が異なる。片面が楕円状を呈し、中央に直径約3.5cmの大きな凹みをもつ。岩側(除行)の可能性がある。

石皿 (第37図 333-336)

333-335は安山岩、336は凝灰質砂岩を利用している。すべて破片であり、片面のみに磨面が観察できる。333は大型で、中央部分は使用により緩やかに凹む。336は中央部のみが極端に磨耗している。

軽石製品 (第38図・第39図 337-347)

19点の出土のうち11点を図化した。使用目的は不明であるが、意図的に円形・楕円形・紡錘形に形状を整えたと思われる備平な軽石が数多くみられた(337-343)。344は表裏および縁縁に明顯な線痕(調整痕)をもつ。土器等の調整具もしくは左右対象であるため装飾品の可能性もある。345は平坦面中央部に上下方向から穿孔されており、浮きあるいは揺飾品の類と思われる。346はU字状、347は船形状の凹みがあり、岩側(除石)的な縁相を呈する。石礫状未製品(278)の出土と併せ、興味深い。

第8表 出土石器計測表(1)

編年層	器物番号	出土位置	器種	種名	材質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
29	296	B-2	Va	石槌	頁岩	2.7	1.0	0.3	1.16	
	297	B-1	Va	石錘	頁岩	2.7	1.8	0.5	1.32	
	298	B-1	Vb	石錘	頁岩	2.5	1.4	0.5	0.98	
	299	B-1	Vb	石錘	頁岩	1.8	1.0	0.6	1.11	
	270	B-1	Va	石槌	チャート	3.3	2.73	1.5	9.27	
	251	B-2	Va	板石打石	燧石	2.1	1.3	0.9	3.00	
	252	A-2	Va	石錘	燧石	3.1	2.2	0.9	5.36	
	273	2トレンチ	Va	スクレイパー	燧石	2.3	2.6	0.8	5.12	
	274	2トレンチ	Va	石錘	燧石	2.2	5.3	0.3	27.35	
	275	B-1	Va	円筒状加工品	燧石	2.0	3.1	0.4	5.82	
30	276	B-1	Va	石錘	燧石	10.1	4.1	1.3	50.62	
	277	2トレンチ	Va	石錘	燧石	14.6	5.7	2.0	174.5	
	278	B-2	Va	石打撃製品	燧石	33.3	5.2	6.03	1078	
	279	B-2	Vb	石打撃品	燧石	16.9	7.0	2.9	175	
	290	A-2	B	石打撃品	燧石	3.8	3.5	2.2	91.5	剥離
	281	B-2	Vb	石打撃品	燧石	9.11	5.41	1.02	96.0	
	282	B-2	Vb	石打撃品	燧石	10.7	5.88	1.07	87.3	
	283	B-1	Va	石打撃品	頁岩	10.35	6.1	0.86	73.8	
	284	B-1	Vb	石打撃品	頁岩	10.4	7.4	1.38	163	
	285	B-1	Va	石打撃品	頁岩	13.56	6.66	1.98	224	F+付着
31	286	B-1	Vb	石打撃品	燧石	13.6	8.0	1.43	181.6	
	287	2トレンチ	Va	石打撃品	頁岩	15.3	8.8	1.0	216.2	F+付着
	288	B-2	Va	石打撃品	頁岩	13.0	8.7	1.57	185.8	
	289	B-2	Vb	石打撃品	頁岩	9.4	5.0	1.15	76.0	
	290	B-1	Va	石打撃品	頁岩	14.9	7.0	1.72	170.0	F+付着
	291	2トレンチ	Vb	石打撃品	頁岩	13.0	6.3	1.36	114.3	F+付着
	292	2トレンチ	Vb	石打撃品	頁岩	12.5	7.6	1.4	143	F+付着
	293	B-1	Vb	石打撃品	頁岩	7.3	4.75	1.64	141	F+付着
	294	B-2	Vb	石打撃品	頁岩	13.2	7.91	1.3	191.2	F+付着
	295	B-1	Va	石打撃品	頁岩	11.0	7.64	1.15	163.6	
32	296	2トレンチ	Va	石打撃品	頁岩	13.7	7.9	1.41	190.8	シラキ付着
	297	2トレンチ	Va	石打撃品	頁岩	7.25	8.8	1.79	125.4	シラキ付着
	298	A-2	Va	石打撃品	燧石	16.0	7.0	2.16	216.5	
	299	B-1	Va	石打撃品	頁岩	14.5	5.62	1.29	186.2	ぬすみ肌 F+付着
	300	B-1	Vb	石打撃品	燧石	11.7	6.1	0.91	58.7	F+付着
	301	B-1	Va	石打撃品	燧石	7.3	7.5	1.02	76.0	剥離付着
	302	B-1	Va	石打撃品	燧石	8.7	6.0	2.01	169.0	
	303	B-1	Va	石打撃品	燧石	5.8	5.31	0.67	21.3	
	304	B-2	Va	石打撃品	燧石	7.1	5.35	0.79	33.8	ワケタイプ
	305	2トレンチ	Va	石打撃品	燧石	2.97	4.8	0.43	3.7	ワケタイプ
306	B-1	Va	石打撃品	燧石	9.3	4.67	1.74	81.0	アレナイドタイプ	

第9表 出土石器計測表(2)

編年層	器物番号	出土位置	器種	種名	材質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
33	307	B-1	Va	石打撃品	燧石	12.0	7.68	3.74	500	全周にわたって剥離付着
	308	B-2	Va	石錘	燧石	7.76	7.63	1.36	104	剥離
	309	B-2	Vb	石錘	燧石	8.57	7.8	1.73	152	剥離
	310	B-1	Vb	石錘	燧石	5.78	5.32	1.67	74	剥離
	311	B-1	Va	石錘	燧石	5.33	6.02	0.91	32.5	
	312	B-1	Va	石錘	燧石	6.92	8.0	1.38	126	
	313	B-1	Vb	石錘	燧石	5.04	2.39	1.93	81.5	
	314	B-2	Vb	石錘	燧石	6.92	6.51	2.7	153.5	
	315	2トレンチ	Vb	石錘	燧石	5.43	8.23	2.13	117	
	316	B-2	Vb	石錘	燧石	8.06	8.85	2.4	216	
34	317	B-2	Vb	石錘	燧石	8.95	8.88	2.12	174.5	
	318	B-2	Vb	石錘	燧石	16.56	9.0	2.25	470	
	319	B-2	Vb	石錘	燧石	5.65	5.28	3.21	156.4	
	320	B-2	Vb	石錘	燧石	3.9	7.54	1.73	127	
	321	B-1	Va	石錘	燧石	7.16	6.68	2.43	161.5	
	322	B-1	Vb	石錘	燧石	5.5+*	4.38+*	2.96	67	剥離
	323	2トレンチ	Vb	石錘	燧石	4.17	3.27	3.53	58.2	剥離
	324	B-1	Vb	石錘	燧石	6.2	8.37	3.89	187.5	
	325	B-1	Va	石錘	燧石	10.3+*	15.7	4.64	2182	
	326	B-1	Va	石錘	燧石	13.35	6.34	3.8	558	
35	327	B-3	Vb	石錘	燧石	4.36	4.23	2.25	75.5	
	328	2トレンチ	Va	石錘	燧石	8.26	7.18	7.85	440	
	329	2トレンチ	Vb	石錘	燧石	0.65	9.1	6.02	370	
	330	2トレンチ	Vb	石錘	燧石	0.25	15.3	4.5	1034	
	331	2トレンチ	Vb	石錘	燧石	13.94	12.55	7.5	1612	
	332	B-1	Va	石錘	燧石	11.0	6.62	5.82	351	剥離?
	333	B-1	Va	石錘	燧石	10.11	10.3	7.93	1132	
	334	B-2	Va	石錘	燧石	12.6	11.1	2.38	623	
	335	B-2	Vb	石錘	燧石	15.8+*	24	12.0		
	336	B-1	Vb	石錘	燧石	11.6	8.75	6.15	634	
36	337	B-1	Vb	石打撃品	燧石	24.5	13.5	5.88	833	二面剥離
	338	B-1	Va	石打撃品	燧石	10.48	8.51	3.97	39.5	全面剥離
	339	2トレンチ	Vb	石打撃品	燧石	9.5	7.4	4.28	89.6	二面剥離
	340	B-2	Vb	石打撃品	燧石	10.7	11.1	2.5	130	二面剥離
	341	B-1	Va	石打撃品	燧石	12.07	13.08	3.4	184.2	全面剥離
	342	B-1	Va	石打撃品	燧石	11.33	8.94	2.25	63.5	全面剥離
	343	2トレンチ	Vb	石打撃品	燧石	8.36	7.03	4.56	30.8	全面剥離(産地不明)
	344	B-2	Va	石打撃品	燧石	7.32	8.1	1.63	13.0	全面剥離
	345	B-1	Vb	石打撃品	燧石	7.25	7.15	4.28	55	
	346	B-1	Vb	石打撃品	燧石	15.23	15.9	8.07	690	剥離?
347	B-2	Vb	石打撃品	燧石	12.43	9.23	3.7	202.7	剥離?	

第IV章 ま と め

今回の調査区は、垂水市柘原の旧國鉄大隅線沿いに約1.6kmにわたって広がる柘原遺跡群の南東端(柘原下)に所在する。遺跡の標高は約7mで、現海岸線から約300m離れている。遺跡周辺の表土中からは土器片とともに貝殻片が多数散布しているため、「貝塚」として認知されている。地元の人によれば、この地域は古くから「塚」と呼ばれ、畑の耕作中によく貝殻や土器片の出土がみられたという。

歴史的背景としては、大正3年にN. G. マンロー博士が鹿児島を訪れた際に「大隅肝付地方のクノギハラ近くで中間土器を出土する貝塚を発見した」とされているが、その正確な位置については詳しい記述がなく、その後調査は行われていないため、長く不明のままであった。鹿児島県教育委員会による昭和52年度大隅地区史前文化財分布調査では、今回の調査区の北西約250mの地点から成川式土器を伴う貝殻が確認されており、マンロー氏の発見した貝塚がこの地域周辺に存在する可能性をうかがわせる。

今回の調査は個人住宅の建設に伴うもので、約95㎡の狭く限定された調査面積ということもあり貝の堆積層等は確認できなかったが、6000点を越える遺物とともに縄文時代晩期の壘穴式住居址2基と、同じく晩期の人骨を伴う土壇墓が2基検出されるという、予想外の成果が得られた。本県における縄文人骨の出土例は少なく、金峰町上焼田遺跡の前期人骨をはじめ、出水市出水貝塚・川内市交の浦貝塚・市来町川上貝塚・鹿児島市軍野貝塚の後期人骨など、十数例が報告されているに過ぎない。遺構に伴う完全な晩期人骨の出土は、考古学ならびに形質人類学上貴重な資料になるといえる。

(1) 遺構について

壘穴住居址

遺構の掘り込み部分から床面にかけての茶褐色粘土の薄い堆積は、遺構を現状のままバックする役割を果たしている。1号住居址の床面直上より出土した土器は、上加世田遺跡の調査をもとにした河口貞徳氏の分類に従えば縄文時代晩期初頭の上加世田式土器の浅鉢で、熊本県天城遺跡においては浅鉢A-4類に属し、同じく晩期前半の天城Ⅲ式に位置づけられるものである。2号住居址は形状や埋土の堆積状況が1号とほぼ同様であり、切り合いをもたずに直接するため、これらは同時に存続していた可能性が高い。以上のことから、2基の住居址は縄文時代晩期初頭のことでありと判断される。ただ炉址が検出されなかったことや、はっきりとした柱穴が少ないこと、全体の正確なプランを捉えられなかったことなど問題点は残されている。

土壇墓

検出された2基の土壇墓は、主軸方向や人骨頭部の向き、遺構内遺物などから同時同軸の中で存在したと考えられる。1号墓からは上加世田式の深鉢が出土し、2号墓からは同じく上加世田式の深鉢・中鉢・浅鉢がセットで出土している。遺物はすべて破片で、埋土中で散乱しているため供託土器であるかは判断が困難である。現時点では可能性の段階に止めておきたい。

これらは1・2号住居址と同時期の縄文時代晩期初頭の遺構である。住居址との位置関係については、2号墓と1・2号住居址とが近すぎる点が疑問であるものの、すべての遺構が切り合うことなくバランス良く配置されている様には意圖的なものが感じられる。

溝状遺構

検出された2本の溝状遺構は、大きさや形状・流れの方向などが異なる。それが用途の違いか、あるいは時期差であるかは不明である。出土遺物から判断して、少なくともⅠは中世以降、Ⅱは近世以降のものと思われる。

(2) 遺物について

縄文土器

Ⅰ-Ⅳ類土器の占める割合は出土土器全体のわずかに数%に過ぎず、すべての遺物包含層から断片的に出土し、接合資料も得られなかった。その大部分は縄文時代後期前半から中葉の土器である。Ⅰ類は小片で腐蝕しているが、前期後半の土器と思われる。Ⅱ類の16は中期末の岩崎下層式にみられる特徴をもつ。17は口縁部の押点文は似るが、胴部は無文で口縁部の形成法にも16と相違点がある。同タイプに含めたが、17はむしろ後期初頭に位置づけられよう。Ⅲa類は志布志町中原遺跡で出土したⅢ類土器に相当する。新東見一氏は、このタイプを阿高式系土器が岩崎下層・上層式から指宿式へと変遷する過程において出現した在地型の土器(中原式)として位置づけている。Ⅲb類は指宿式土器に比定される。なかでも33は、本田道輝氏が川辺町田中原遺跡出土の土器形態の中から、松山式への変化の発端となる口縁部上面施文型の土器として指摘分類したタイプにあたる。Ⅳ類は市来式土器に比定される。48は、そのなかでも軍野タイプ(軍野式)とされる一群にみられる裝飾突起部分である。Ⅴ類は丸尾式。Ⅵ類は納納式土器に相当する。Ⅶ・Ⅷ類は徳川系土器で、Ⅷ類は北久根山式、Ⅶ類は西平式に比定されるものである。Ⅰ-Ⅷ類はその密度の薄さと反比例して実にバラエティに富み、この地域における縄文中-後期文化の流れと多様性を概観させるものといえる。Ⅷ類は、胴部最上段に最大径をもち、頸部が直行もしくは弓なりに外反し、器面内外に研磨を施すものが多い深鉢形土器を総括した。本タイプが多量に出土している天城遺跡の分類に従えば、Ⅷa類が天城Ⅱ式、Ⅷb-Ⅷc類が天城Ⅲ式に比定される。天城Ⅱ式は御領系で後期末、天城Ⅲ式は本県では上加世田-黒川類に相当するが、細分すればⅧb・d類は上加世田式、Ⅷc類は広式にありと見られる。Ⅷc類の胸臑曲部直上に凹線をもつものは、天城遺跡・上加世田遺跡・川内市川原遺跡の資料によれば後期末の約前期から晩期初頭の上加世田期までみられる。Ⅷf類は頸部以下の形状が不明であるが、天城Ⅱ式や川原遺跡の深鉢Ⅴ類に類似がある。黒川式土器の範疇に属するものと見られる。

Ⅷ類土器は、後期末葉から晩期前半にかけてみられる形態である(上加世田遺跡浅鉢Ⅱ類・天城遺跡浅鉢A-4類)。口縁部の形状は浅鉢の要素があり、頸部以下の器形の印象や器面研磨の粗さなど深鉢とみても不自然ではない。口径と器高の比率についても、深鉢としては口径が大きく、浅鉢というには中途半端な高さである。賀川光夫氏は、このタイプを深鉢形土器の総形として後期初頭式にその祖型を求め、さらにその後黒川式までに到る過程において、各時期間の器形相互の影響下で微妙な変化をたどることを指摘している。本報告書では、後期後半-晩期における深鉢・浅鉢の定義が、器形細部の比率や器面調整法の使い分けによる機能的区別に基づくものであれば、上加世田期の深鉢・浅鉢のセットは本遺跡のⅧ類土器を含めて概略3タイプ(深・中・浅鉢)に分けられると仮定した。従来名称が固定化しない本タイプは、ここでは武家的に「中鉢」と呼称しておきたい。胴-頸部の屈曲角や胴-底部の傾斜角などが判別材料となるが、

本タイプを破片から分類するのは困難であり、小片の多い本遺跡においても充分に行えたとは言えない。今後は他遺跡との傾向の比較と細部の数値データの検証、模範面についての検討などを行っていく必要がある。

Ⅲa-c・Ⅳ類は上加世田式、Ⅴd類は入佐式の浅鉢に相当する。Ⅴe類は熊本県古閑遺跡では浅鉢Ⅲ類、天城遺跡の浅鉢c-2類に比定される晩期前半の土器である。Ⅴf類は黒川式にあたるものと思われる。Ⅴg類はマリ形として分類される例もあるが浅鉢を意識した頸部のラインから、ここでは上加世田期の浅鉢として位置付けておく。

Ⅴh類は上加世田遺跡や古閑遺跡においても出土している晩期初頭の精製小環鉢で、祭祀性の強い浅鉢のミニチュアである。Ⅴb類は古閑遺跡におけるOb類に相当し、特に238についてはほぼ同様のものが報告されている。これらは近畿地方を中心に西日本の縄文晩期にみられる滋賀里式土器の特徴をもつ。天城遺跡においても晩期前半のⅢ式の時期に混入するとされる。また大分県楠野遺跡でも入佐式相当の土器とともに出土しており、滋賀里Ⅱ式に比定されている。237については、文様の特徴から滋賀里Ⅰ-Ⅱ式相当と思われる。Ⅴe類は器形が不明確であるが、鹿尾水ノ谷遺跡に類似がみられる。全体の器形としては兜形を呈するもので、時期としては晩期前半と捉えておく。Ⅴd類の注口土器については、類似に乏しく正確な判断は困難である。これまでの県内の例と比較しても、形状や文様は特異な印象を受ける。施文は晩期後半にみられる羽状沈線に似るが、三刀田式や鳥井原式のそれとは太さ・長さの点で異なる。あるいは男根をモチーフとした独立した文様であるかもしれない。丁寧な研削や他の出土土物の時期等から、被期末-晩期初頭の幅を考えたい。

弥生土器

本遺跡出土の弥生土器は点数が少なく、包含層中の出土ゆえ懸位的な見え方もできないが、遺物としては中期の枠内で多様な様相を呈している。243は屈曲径長く垂れ下がる口縁部をもつ中期初頭のものである。244-253は水平もしくは若干垂れ下がるL字口縁と、稜が比較的ならかな三角形貼付突帯をもつ中期前半のもの、254-256・260はやや上向きに外転するL字口縁と、鋭角的な稜の三角形貼付突帯をもつ中期中-後半に位置するものである。265の壺形土器については類似に乏しく、正確な判断は難しい。きめの細かい胎土や色調・器形等は古墳時代の埴形土器を連想させ、駒屈曲部直下という縄文文化の位置も特徴的である。現時点においては弥生後期-古墳時代の幅で捉えておき、資料の蓄積を待たたい。

石器

石錐・石匙・石斧・磨石・敲石・石皿・砥石・石鏝といった生産用具のバリエーションは豊富であり、特に真岩製打製石斧の出土頻度は極めて高いといえる。また有溝砥石(307)の存在は、上加世田遺跡同様ヒスイ製勾玉・管玉の出土も予感させたが、土坑室内をはじめ調査区域からそれらの出土は確認できなかった。ただ石棒状石器未製品(278)や陰石棒状石製品(346・347)は本遺跡における精神生活面の一端を示唆している。これら石器の時期特定は困難であるが、余剰の組成は上加世田遺跡と類似する。縄文時代晩期初頭を主体とする土器組成も含め、打製石斧の多さ、攻玉用(?)有溝砥石や砥石製品の出土など生産・精神文化両面において、この二つの遺跡は多くの共通点をもつといえよう。

(3) 貝塚について

先述したように、今回の調査において貝殻の堆積や貝殻を含めた動物遺存体の検出はなく、本遺跡が貝塚を伴うものであるかは次回以降の調査に委ねられた。冒頭で触れたマンロー博士が発見した「クノギハラ」の貝塚出土遺物は、現在イギリスのケンブリッジ大学に寄附されている。写真資料で判断する限りにおいてそれらは成川式土器であり、本遺跡の主体である縄文時代上加世田期の遺物とは一致しない。昭和52年度の大分地区文化財分布調査の結果からみても、松原遺跡群内に古墳時代の貝塚が存在することは明白で、マンロー博士がその一つを発見したことは事実であろう。ただ本遺跡における、海岸に近い標高7m前後の緩やかな丘陵地という立地や、堅穴住居跡・土灰塚といった定住生活の痕跡は、付近に縄文時代の貝塚が存在した可能性を示すものである。

【参考文献】

- 熊本県教育委員会 『熊本県史料集(十一) 松原編』 1996
 岸 沢 長 介 『マンローがケンブリッジ大学に寄附した日本の資料その佳について』
 『考古学研究 第24巻 第3・4号』 1977
 河 口 貞 徳 『上加世田遺跡』 『上加世田3号』 1969
 『考古学ジャーナル第30号』 1969
 『上加世田遺跡調査概報』 1971, 1972
 『鹿児島考古7号』 1973
 熊本県教育委員会 『古保山・古閑・天城』 『熊本県文化財調査報告 第47集』 1980
 志布志町教育委員会 『中原遺跡』 『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告第9』 1985
 新 東 晃 一 『縄文土器-九州地方 南九州(2)-』 『考古学ジャーナル第296号』 1988
 本 田 進 輝 『田中塚遺跡出土の口縁部上面施文型の土器について』
 『鹿大史学 第31号』 1983
 上加世田市教育委員会 『上加世田遺跡-1』 『上加世田市埋蔵文化財発掘調査報告第1』 1985
 上加世田市教育委員会 『上加世田遺跡-2』 『上加世田市埋蔵文化財発掘調査報告第4』 1987
 東郷町教育委員会 『川風遺跡-屋根添遺跡他』 『東郷町埋蔵文化財発掘調査報告第2』 1990
 賀 川 光 夫 『縄文晩期文化 九州』 『新編考古学叢書 第3巻』 1969 雄山閣
 大分県教育委員会 『楠野』 『大分県文化財調査報告 第63集』 1983
 鹿屋市教育委員会 『上蔵川遺跡群』 『鹿屋市埋蔵文化財調査報告第1』 1984

第V章 垂水市柘原貝塚出土の縄文時代人骨

篠 和治・竹中 正巳・小片 丘彦
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座)

[はじめに]

平成7年7月、鹿児島県垂水市柘原下所の^(2号墓)柘原貝塚の発掘調査で、縄文時代晩期の土壌墓(1号墓及び2号墓)から2体の人骨が出土した。1号墓では頭蓋が断片的に残っていただけであったが、2号墓では全身の骨格が比較的良く残っていた。南九州における縄文時代人骨の報告例は数少なく、特に大隅半島から保存良好な人骨資料が発掘されたのは今回が初めてである。柘原人骨は、縄文人系質の地域性を明らかにするうえで貴重な情報を提供するものと考えられる。以下、2号墓骨を中心とした基本的記載を行った後、柘原人の形質的位置付けに関する若干の考察を加えた。

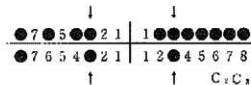
[人骨所見]

1) 2号土壌墓人骨(男性・熟年)

出土状態：埋葬姿勢は、左右の膝と股関節を強く曲げた仰臥屈葬であった。両腕は左方へ倒れ、それに伴って骨髄もやや左向きに回転していた。右上肢は肘をほぼ直角に内方へ曲げて、膝椎の上に手を置き、左腕は上腕を真っ直ぐに下ろして、肘から先を軽く外方へ開いていた。ほぼ全身の骨格が残っていて、頭蓋の保存状態は良好だが、骨幹部肢骨は骨質が脆く、腐食が相当に進んでいた。

性・年齢：性別は、骨盤と頭蓋の形状から男性と判定した。年齢は、頭蓋縫合と歯列の状態から熟年と推定した。

頭蓋：外後頭隆起が発達し、項平面はやや凹凸が強い。眉間から眉弓にかけて丘状の高まりを形成し、前方へ突出する。前頭外骨縫合部の陥凹はそれほど深くはないが、鼻樑部の水平凸曲は強い。乳様突起は基部が幅広く、上下的には短い。3主縫合の閉鎖は、ラムダ縫合の内板にだけ見られる。頭蓋最大長は185mmとやや長い、最大幅が154mmと非常に大きいことから、長顔示数(83.2)は短頭型に入る。またバジオン・プレグマ高が127mmと低いことから、長高示数(68.6)と幅高示数(82.5)は小さくなっている。つまり、短頭蓋は短頭で強い低頭性を示す。顔面部は全体的に横幅が広く、顔示数・上顔示数は低・広顔に入る。顔面部の側面観は、側面角の大きさにも表れている通り直顎的である。非計測的小変異としては、ラムダ縫合(左右)、横後頭縫合痕跡(右)、プレグマ小骨、冠状縫合骨(左)、副眼窩下孔(右)、卵円孔形成不全(右)などが認められる。また、左右外耳道の前壁上部に弱い外耳道骨種が認められる。歯列の状態は次の通りである(数字は歯立圖)。



●：歯槽閉鎖、↑↑：風習的抜歯の部位
C：齶歯の進行度

咬合様式は錯字状で、咬耗はMartinの2~3度。上下顎前歯と下顎右大白歯に象牙質の面状露出が見られる。上顎左側は側切歯以後の歯をすべて喪失しており、咬合のバランスが大きく崩れている。下顎左の第2、第3大白歯には頰側面頸部に大きな隆起がある。下顎右第1小白歯の歯冠中央部に溝状のエナメル質減形成が見られる。

下顎犬歯の喪失は左右対称で、隣接の側切歯と第1小白歯が傾斜してきていることから、風習的抜歯によるものと考えられる。上顎は生歯の喪失歯が多いが、通常の抜歯型式からみて、少なくとも側切歯は抜歯されていたであろう。上下顎の犬歯4本の他にも、上顎の歯が抜かれていたかどうか、決め手に欠ける。

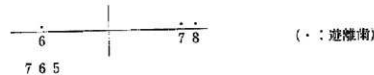
体幹骨：2~7頸椎には連続して、椎体と関節突起の辺縁骨増殖(骨棘形成)および多孔化が見られる。第3~4頸椎と第6~7頸椎は、椎体の外側縁付近で上下的に癒合している。

体肢骨：頭蓋に比べて体肢骨の保存状態は概して良くない。上腕骨は三角筋断面が発達して、骨体が扁平である。尺骨では、骨体中央の最大径が骨間線と後縁との間に、最小径が前縁と後面との間にあり、縄文人に多い断面形状を呈している。大腿骨には柱状形成と骨体上部の扁平化がみられる。脛骨の扁平性は、腐食のため確認できない。

推定身長：主要体肢骨で最大長が計測できたのは右桡骨(238mm)だけで、ピアソン(P)と藤井(F)の式によれば、推定身長は163.7cm(P)、161.2cm(F)となる。右上腕骨は取り上げ時に破損することが予想されたので、発掘現場で最大長を概測したところ、300であった。仮にこの値を用いると、推定身長は157.5(F)、156.9(P)となる。上腕骨と桡骨では推定身長に大きな差が出るが、これは一般に縄文人の体肢遠位部が相対的に長い傾向、つまり上腕に比べて前腕が長いことに起因するのかもしれない。

2) 1号土壌墓人骨(男性?・壮年)

本例では、右の粗頭骨と3歯の直立した下顎骨の一部および5個の遊離歯だけが残っていた。遊離歯のうち、下顎の左右第1(または第2)大白歯2個は、歯冠形態や咬耗度の違いから別個体のものである可能性が高い。従って、本例この個体に属すると考えられるのは、下の6個である。



下顎大白歯の咬合面溝の形態は+型で、別個体とみられる遊離大白歯のX型とは異なる。咬耗はMartinの1~2度で、さほど進行していない。第3大白歯の萌出と咬合面のわずかな咬耗を考え合わせると、年齢は壮年とみられる。性別判定の材料には乏しいが、粗頭骨や下顎骨、歯の径などは全体的に大きく、幾分男性的な印象を受ける。外耳道に骨種の形成は見られない。

【考 察】

1) 南九州縄文人の形質

南九州において縄文時代人骨が出土した遺跡は、現在までに十数か所が知られているが、保存良好な資料の人類学的記載が行われているのは、中期の出水貝塚4体（大森・他、1960）と後期の市来貝塚3体（内藤、1984）が主なものである。薩南諸島にまで範囲を広げれば、種子島長崎島（金剛、1958）と沖永良部島中雨洞穴（松下、1984）の各1体が報告されている。内藤（1984）によれば、市来縄文人は長崎島縄文人とは異なり、他の九州縄文人と類似性が高いという。

脳頭蓋の形態に着目してみると、市来縄文人の男性は中頭（79.46）、女性では短頭（82.42）に属し、出水縄文人もこれに近似している。バジオン・ブレグマ高が計測できた市来人男性は144mmと頭高がやや高く、長高、幅高示数は大きな値を示している。中雨洞穴の女性人骨は長頭（74.86）で、バジオン・ブレグマ高も高い。移居縄文人は頭幅が大きく、頭高が低いため、短頭で低頭である。脳頭蓋の形態からみると、移居人は市来人より、短頭（84.86）で前頭の低い（耳ブレグマ高111mm）長崎島人に近い。

縄文人に共通する形態的特徴としては、一般に以下の事項があげられる（山口、1982ほか）。

- ①脳頭蓋の長さや幅が大きく、高さが低い。
- ②顔面の幅が大きく、高さが著しく低い。
- ③眉間と鼻骨が突隆し、前頭鼻骨縫合が陥凹する。
- ④咀嚼筋の着く下顎枝や前頭隆が強く発達している。
- ⑤咬合型が錯干状である。
- ⑥上腕骨が比較的短く、骨幹が太く扁平である。
- ⑦尺骨の骨体横断面の形が特異である。
- ⑧上腕に対して前腕が、大腿に対して下腿が相対的に長い。
- ⑨大腿骨が強大で、柱状性が強い。
- ⑩脛骨の扁平性が強い。

これら縄文人に共通する形質は、前頭鼻骨縫合の陥凹の関を除けば移居人にもほぼあてはまる。ただ、脳頭蓋が短頭で低頭性が高いという点は移居人の特徴であり、して近隣地域の中に類似性を求めるとすれば、種子島長崎島人があげられるであろう。

試みに、脳頭蓋の計測値9項目をもとに移居人からのベンローズ形態距離を求めたところ、津養縄文人（清野・宮本、1926）や関東縄文人（Suzuki, 1969）との距離が最も小さく、各地方の現代人からの距離は大きくなった。しかし、これらの縄文人集団との類似性が特に強いと言えるほど、形態距離は小さくない。この結果は、顔面部の低さという点では共通するものの、移居人の脳頭蓋が他の縄文人と比べてかなり特徴的であることの反映と考えられる。

2) 風習的技術

縄文時代晩期の日本列島には風習的技術が盛行したが、春成（1995）は西日本（愛知県～鹿児島県）の技術を上顎犬歯2本を抜いたあと、下顎切歯4本を抜く4I系と、下顎犬歯2本を抜く2C系の2系列があることを認めている。九州の縄文時代における風習的技術の南限は、薩摩半島上焼田遺跡（縄文時代晩期）の熟年男性骨に見られた下顎の両側第1小臼歯間8歯の抜去何（内藤・坂田、1977）とされている。上焼田例は4I系の4I2C型とみられるが、移居人の技術は、上下顎4本の技術で、春成のいう4C型に入る。縄文晩期における技術風習の地域的な広まりを考える上でも、興味深い追加資料である。

【主要参考文献】

- 春成秀爾、1995：葬制と親族組織。考古学研究会40周年記念論集『展望考古学』、pp.8493。
金岡文夫、1958：鹿児島長崎島遺跡出土人骨に見られた下顎中切歯の水平研削例。
九州考古学3・4：1-3。
清野謙次・宮本博人、1926：津養貝塚人骨の人類学的研究。第2部 頭蓋骨の研究。
人類学雑誌41：95-140, 151-208。
清野謙次・平井 隆、1928：津養貝塚人骨の人類学的研究 第3・4部。
人類学雑誌 43（付録）。
松下孝幸、1984：鹿児島県知多町（沖永良部島）中雨洞穴出土の人骨。鹿児島考古 18：33-59。
内藤芳雄・坂田邦洋、1977：上焼田遺跡出土の人骨。鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告第5）
【指通・橘聖・中之丞・上焼田遺跡】、pp.74-78。
内藤芳雄、1984：南西諸島における古代人骨の人類学的調査研究—市来縄文人よりの考察—。
龐大考古 2：84-91。
大森浅吉・他、1960：薩摩国出水貝塚出土（昭和29年）の人骨について。
鹿児島医学雑誌 33：269-282。
Suzuki, H. . 1969：Microevolutional changes in the Japanese population from the prehistoric age to the present-day. J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. V. Vol. III (4)：279-309。
山口 敏、1982：縄文人骨。縄文文化の研究 1。pp.15-88。藤山園。

表1 顔面蓋の主要計測値 (mm) と示数

Martin 系		杉原2号室	津雲純文(男)
1	頭蓋最大長	185	186.4
8	頭蓋最大幅	154	14.4
17	B a - B r ^高	127	134.0
8/1	頭長顯示数	83.2	77.7
17/1	頭長高示数	68.6	71.6
17/8	頭幅高示数	82.5	92.2
1 + 8 + 17/3	頭蓋モズルス	155.3	154.9
20	耳ブレジマ高	112	112.9
5	頭蓋底長	100	103.4
9	最大前頭幅	98	95.5
10	最大前頭幅	118	120.9
11	両耳幅	135	125.2
12	最大後頭幅	119	114.0
13	乳突幅	107	106.1
7	大後頭孔長	37	34.8
16	大後頭孔幅	31	25.6
16/7	大孔示数	83.8	86.3
23	頭蓋水平周	541	532.3
24	横弧長	311	310.3
25	正中矢状弧長	368	375.0
26	正中矢状前頭弧長	126	121.9
27	正中矢状頭頂弧長	123	130.9
28	正中矢状後頭弧長	119	122.0
29	正中矢状前頭弦長	112	108.9
30	正中矢状頭頂弦長	108	117.2
31	正中矢状後頭弦長	99	101.7
26/25	前頭矢状弧示数	34.2	32.7
27/25	頭頂矢状弧示数	33.4	34.7
28/25	後頭矢状弧示数	32.3	32.6
27/26	矢状前頭頭頂示数	97.6	107.0
28/26	矢状前頭頭頂示数	94.4	99.2
28/27	矢状頭頂後頭示数	96.7	
29/26	矢状前頭示数	88.9	89.5
30/27	矢状頭頂示数	87.8	89.6
31/28	矢状後頭示数	83.2	83.6

表2 顔面蓋の主要計測値 (mm) と示数

Martin 系		杉原2号室	津雲純文(男)
40	額長	101	102.7
45	頭骨弓幅	147	143.2
46	中顔幅	101	103.6
47	額高	118	115.8
48	上顔高	68	67.0
47/45	Kollmann顯示数	80.3	79.6
47/46	Virchow顯示数	116.8	
48/45	Kollmann上顯示数	46.3	48.3
48/46	Virchow上顯示数	67.3	67.7
43	上頰幅	106	109.0
44	両眼窩幅	100	102.0
50	前眼窩間幅	17	19.2
51	眼窩幅	(右) 44 (左) 43	43.7 43.5
52	眼窩高	(右) 34 (左) 34	33.6 33.5
52/51	眼窩示数	(右) 77.2 (左) 79.0	76.6 76.5
54	鼻幅	27	26.6
55	鼻高	50	48.6
54/55	鼻示数	54.0	54.5
57	鼻骨最小幅	10	9.2
72	全側面角	84	81.9
73	鼻側面角	88	85.8
74	密槽側面角	70	70.9
65	下顎頭門幅	138	129.6
66	下顎骨幅	103	105.4
68	下顎体長	70	75.0
68(1)	下顎骨長	106	
69	オトガイ高	34	33.5
69(1)	下顎体高	(右) 32 (左) 32	32.0 31.8
69(3)	下顎体厚	(右) 11 (左) 11	12.9 12.7
70 a	下顎頭高	(右) 54 (左) 55	
70	下顎枝高	(右) 62 (左) 64	61.8 62.3
71	下顎枝幅	(右) 32 (左) 31	34.0 33.7
71/70	下顎枝示数	(右) 51.6 (左) 48.4	55.1 54.0
79	下顎枝角	(右) 128 (左) 128	121.1 121.6

表3 顔面平均度計測

		杉原2号墓	岡東純文(男)
前頭骨	弦	99.6	99.6
	垂線	14.8	16.4
	示数	14.8	16.5
鼻骨	弦	9.7	10.2
	垂線	4.3	4.6
頬上顎骨	示数	44.1	45.5
	弦	99.7	102.8
	垂線	20.6	22.9
	示数	20.7	22.2

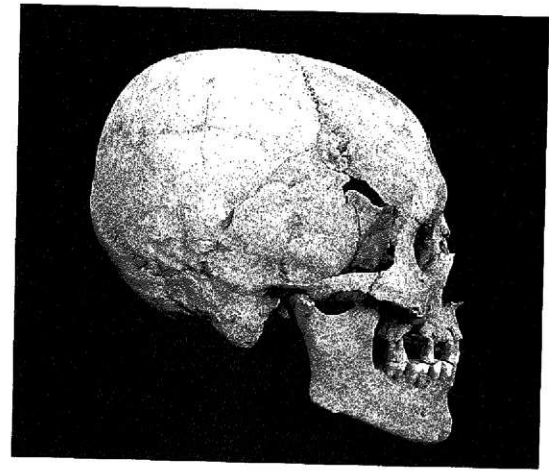
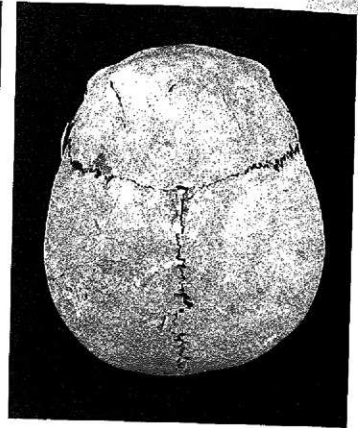
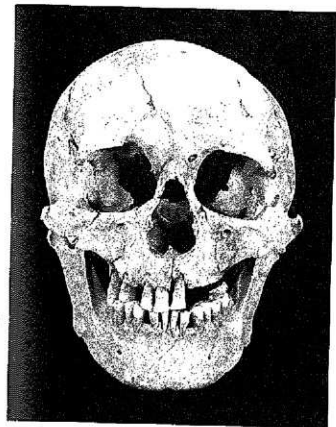
表4 杉原2号墓頭蓋の非計測的小変異

	右	左
ラムダ小骨*	-	-
ラムダ縫合骨	+	+
インカ骨*	-	-
横顔縫合残存	+	-
アステリオン小骨	+	-
枕頭孔突縫合骨	-	-
頭頂切痕骨	-	-
冠状縫合骨	-	+
アレグマ小骨*	-	-
前頭縫合残存*	-	-
眼窩上神経溝	-	-
眼窩上孔	-	+
前頭孔	-	-
二分頰骨	-	-
横頰骨縫合痕跡	-	-
頰骨顔面孔欠如	-	-
口蓋隆起*	-	-
内側口蓋管骨橋	-	-
外側口蓋管骨橋	-	-
顎管欠如	-	-
枕頭顔前縮節	-	-
第3後頭顆*	-	-
舌下神経管二分	-	-
頸靜脈孔二分	-	-
フシケ孔	-	-
ベカリウス孔	-	-
卵円孔形成不全	+	-
翼棘孔	/	-
左側横溝溝隆起*	-	-
顔オトガイ孔	-	-
下顎隆起	-	-
顎舌骨筋神経管	-	-
顔下顎窩	-	-

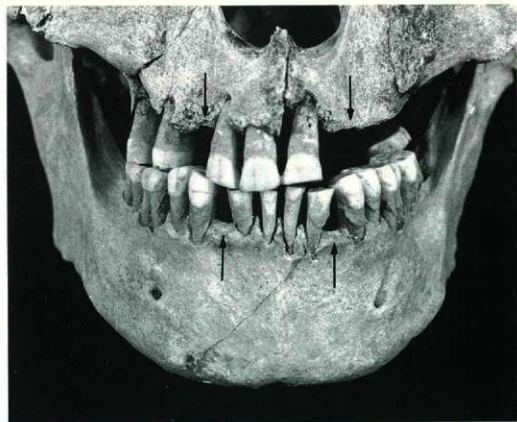
+ : 有, - : 無, / : 観察不能, * : 正中の形質

表5 体幹骨の主要計測値(mm)と示数

Martin 並		杉原2号墓	津雲純文(男)		
〔頸骨〕		(左)	(右)		
	4	中央垂直径	11	10.1	
	5	中央矢状径	13	13.2	
4/5	中央断面示数	84.6	76.6		
〔上腕骨〕		(右)	(左)	(右)	
	5	中央最大径	24	24	23.9
	6	中央最小径	17	16	17.5
	7	骨体最小周	65	63	65.2
	7a	中央周	68	66	
6/5	骨体断面示数	70.8	66.6	72.7	
〔桡骨〕		(右)	(右)		
	1	最大長	238	235.2	
	3	最小周	41	44.5	
	4	骨体横径	17	17.2	
	5	骨体矢状径	12	11.8	
	4a	骨体中央横径	16		
	5a	骨体中央矢状径	12		
	5(5)	骨体中央周	45		
	3/2	枝厚示数	18.2	20.5	
	5/4	骨体断面示数	70.6	69.2	
5a/4a	中央断面示数	75.0			
〔尺骨〕		(右)	(右)		
	3	尺骨周	41	39.3	
	3'	中央周	49		
	11	尺骨前後径	16	14.2	
	12	尺骨横径	17	16.3	
	11'	中央最小径	13	12.4	
	12'	中央最大径	17	17.0	
	11/12	骨体断面示数	94.1	87.3	
	11'/12'	中央断面示数	76.5	73.2	
	〔大腸骨〕		(右)	(左)	(右)
6		骨体中央矢状径	28	28	29.3
7		骨体中央横径	24	24	25.5
8		骨体中央周	84	84	86.8
9		骨体上横径	29	-	30.4
10		骨体上矢状径	24	-	23.1
6/7		骨体中央断面示数	116.7	116.7	114.6
10/9		上骨体断面示数	82.8	-	76.5



2号土壇墓人骨の頭蓋



上：2号土城墓人骨の鳳留の抜歯（上下顎犬歯部：矢印）
 下左：主要体肢骨 下右：第2～7頸椎全面（椎体の癒合：矢印）

図 版



調査区近景



発掘調査風景



遺物出土状況



溝状遺構 (B-1区)



土層断面 (B-1区南壁)



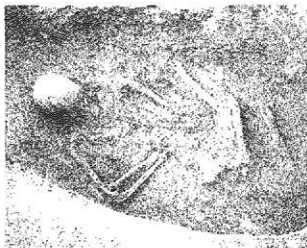
有溝礫石出土状況



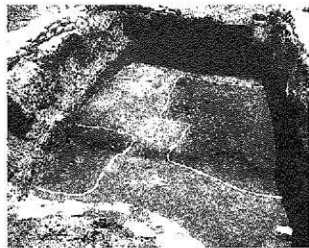
1号土坛墓坑出状况



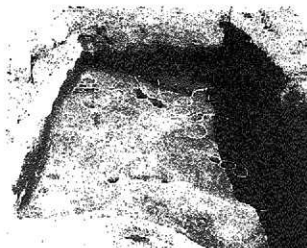
2号土坛墓坑出作类风景



2号土坛墓人骨



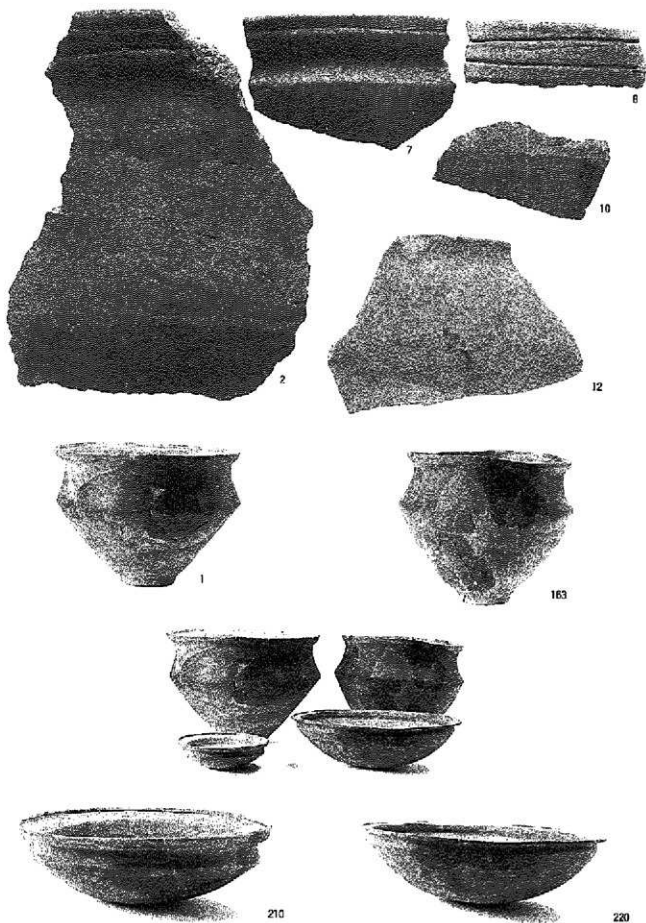
遗物出土状况 (B-1·2区)



遗物出土状况 (B-1·2区)

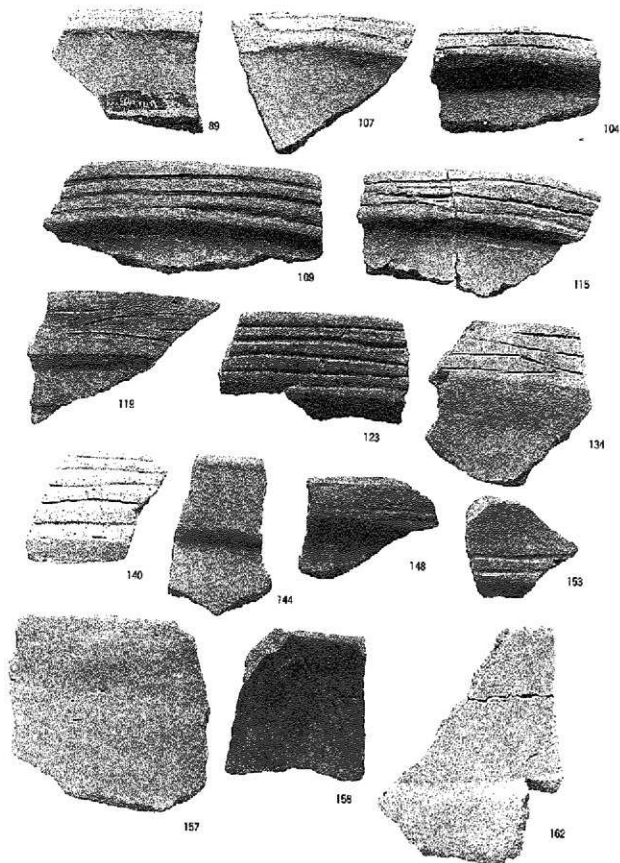
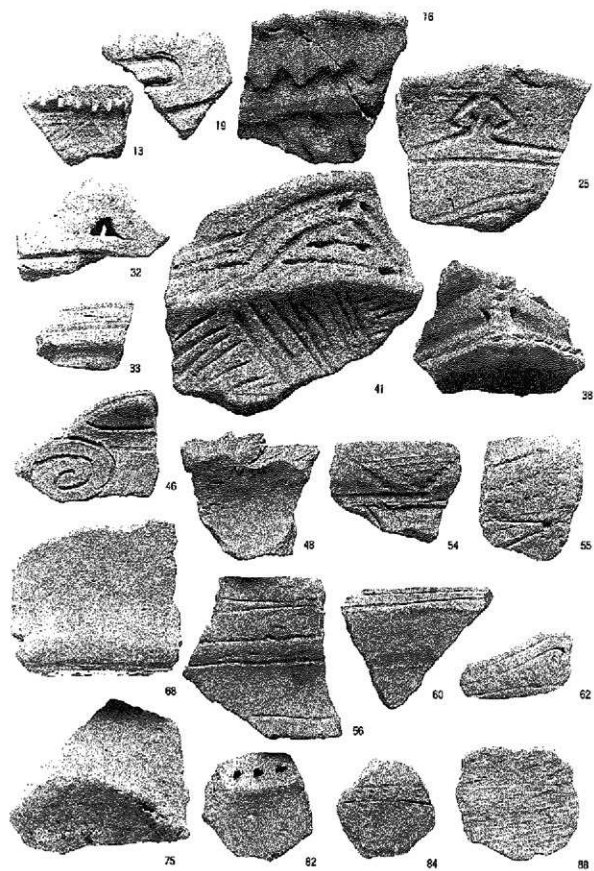


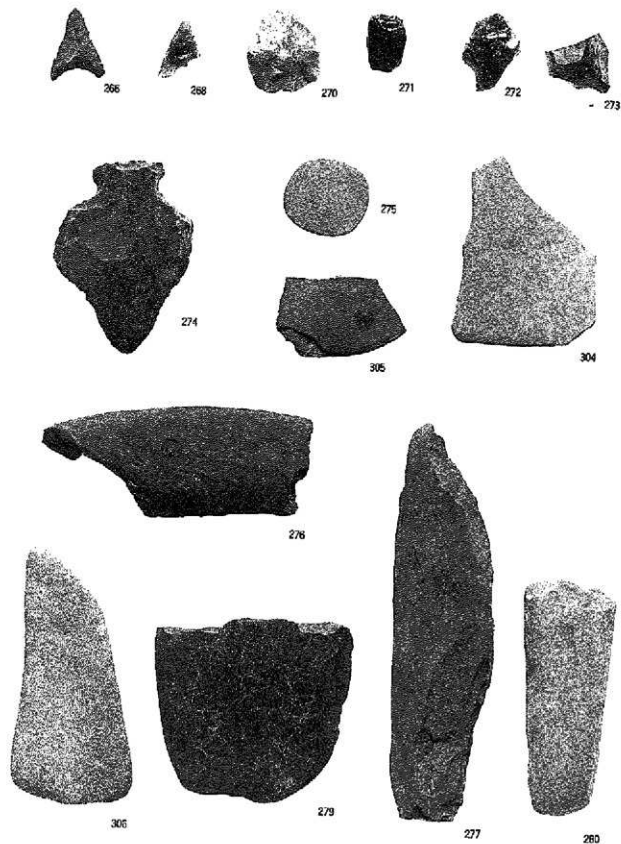
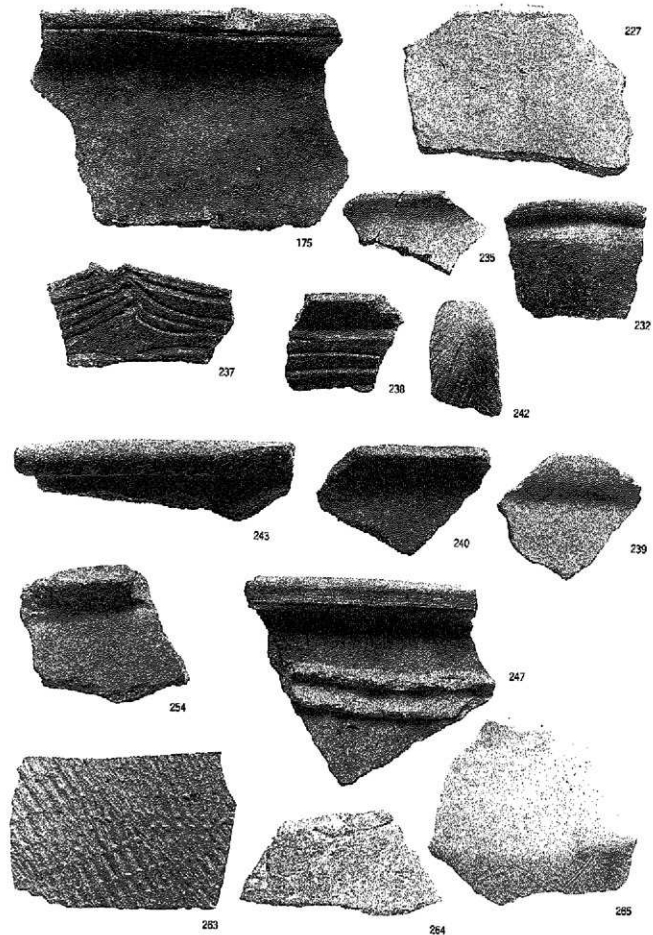
1号住居址遗物出土状况

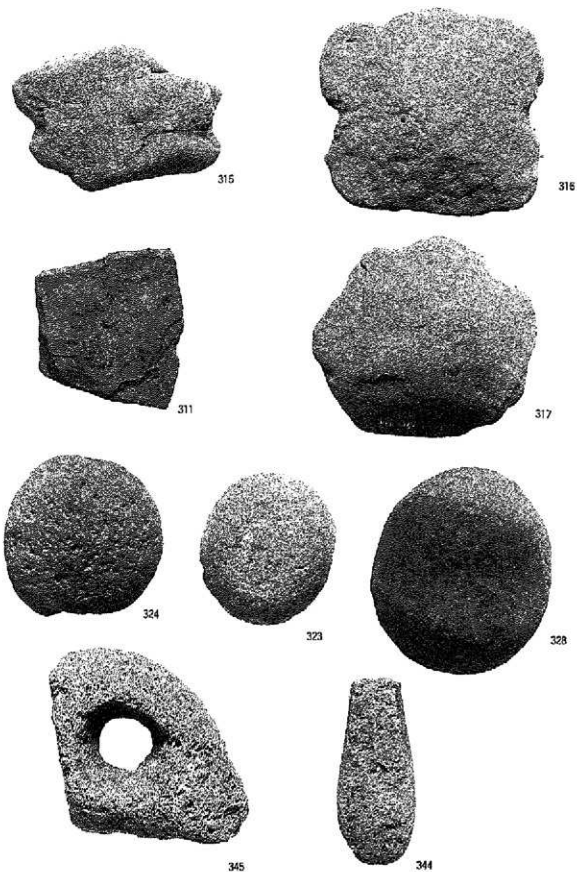
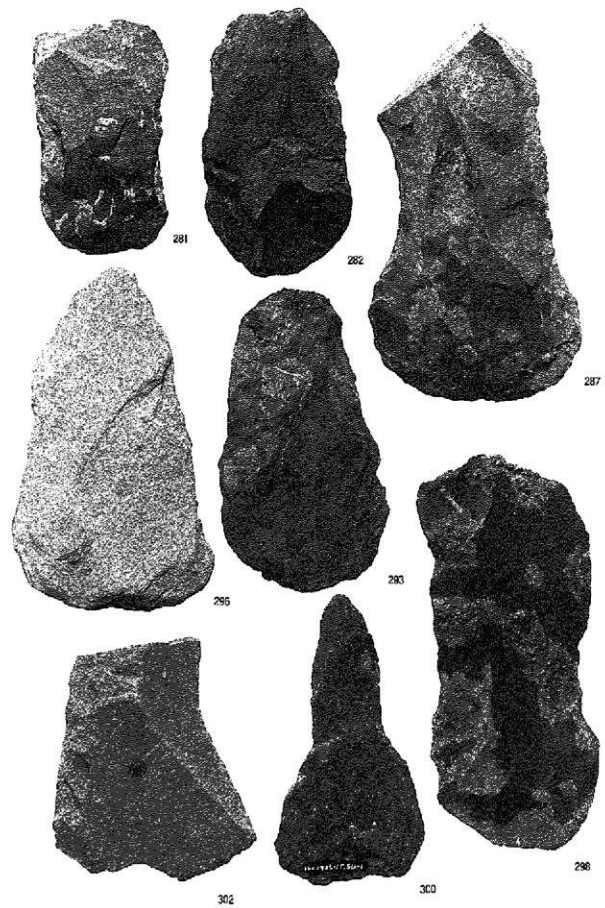


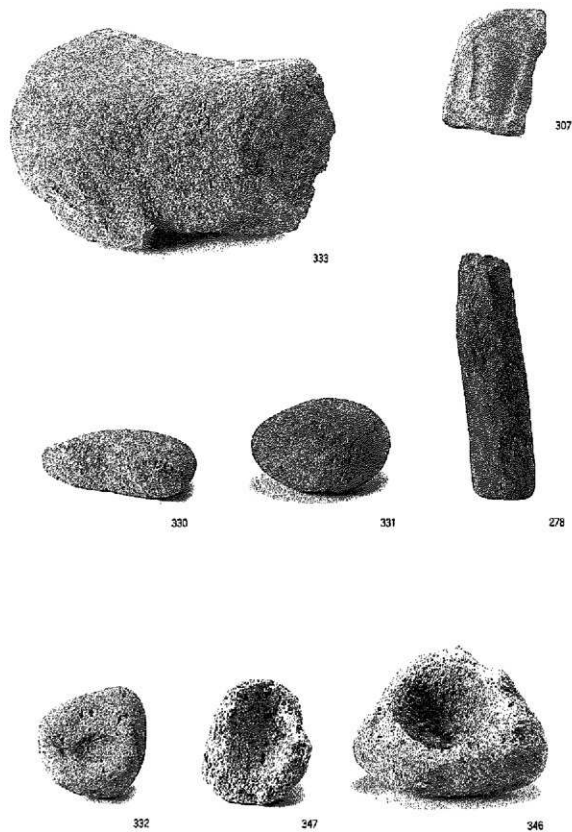
210

220









垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

柘原貝塚

発行 1996年3月
 編集 垂水市教育委員会
 鹿児島県垂水市旭町51
 印刷 株式会社トライ社
 鹿児島市鹿野町12-6
 ☎099-226-0816

96.4.19



埋文だより

第9号

平成7年9月1日発行

3000年前の人骨が出土!



土塚墓から出土した人骨

【調査地】 鹿児島県 垂水市 柘原 塚

《所在地：垂水市柘原下》

平成7年6月から垂水市教育委員会が調査を行った柘原貝塚内の砂地から、平面形が長径約150cm、短径約90cmの楕円形の穴が2基発見されました。それぞれから人骨が出土したことから、穴は人を埋葬する「土塚墓」と呼ばれる墓であることがわかりました。

2体のうち1体は、頭蓋骨を含めてほぼ完全に残っており、手足を折り曲げた「屈葬」という状態で埋葬されていました。

体の上に置いたと思われる銅文時代晩期初頭の土器の年代から、これらの墓が作られたのは、今から約3,000年前であることがわかりました。

銅文時代の人骨が出土した例は、県内ではこれまでに市来町川上貝塚など5か所ありますが、大隅半島では初めての発見です。

(写真提供 垂水市教育委員会)

目次

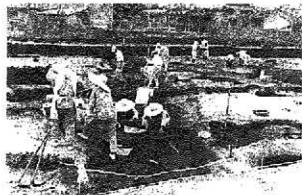
	頁
・柘原貝塚	1
・発掘調査紹介(6)	2~3
・谷山北側遺跡	
・弥勒院跡	
・フミカキ遺跡	
・中尾遺跡	
・学督展示室から	4
— 鎌倉・室町時代 —	
・発掘調査の手順(2)	5
— 確認調査 —	
・「写増から」	5
・発掘調査中の遺跡	6

発掘調査紹介(8)

ミゾで分けられた集落発見!

谷山山丘遺跡 (所在地: 鹿児島市上福元町)

谷山北遺跡は、標高約6mの沖積平野の微高地にあり、江戸時代に谷山麓の中心として「御飯屋」のあった谷山小学校の百周年にあたり、この場所は、昭和35年7月酒院増築工事



発掘調査風景

の際、弥生時代の壺形土器や埴形土器等が多量に見えられ注目されていました。

今回、マンション建設に伴う発掘調査では、幅3~4m、深さ1.5m、断面V字状の溝状遺構が発見され、溝の中からは弥生時代中期の土器が多く出土しました。また、周辺からは柱穴も多く発見され、この一帯に約2,000年前の集落が存在したことがうかがわれました。東側は錦江湾に接し、西側は水田地帯と思われる低湿地をひかえていたと考えられます。そのほか出土土器の中には、同時期のもものでは県下でも出土例の少ないノ宮式土器も発見され、貴重な資料として注目されています。

(鹿児島市教育委員会 出口浩)

700年前の土器がザクザク!

弥生時代中期土器 (所在地: 鹿児島市上福元町)

弥生時代は、鹿児島市宮に隣接する宮内小学校の敷地内にあり、沖積低地内にある標高約10mの台地上に立地しています。

校舎増築に先立ち、平成6年度に第1次、平成7年度に第2次調査を実施しました。

弥生時代は、もともと鹿児島市宮と関係が深く、平安時代から続くお寺でしたが、廃仏忌製で壊



まとまって出土した小皿

されてしまいました。江戸時代末期に創られた「三箇名 勝国寺」に見取り図が残っている程度で、詳しいことはわかっていませんでした。

これまで、平安時代から江戸時代までの遺構、遺物が多くみつかっています。遺構では、柱穴や溝・溝・貯蔵穴などが多数見つかり、その中から土師器・須恵器・中国製青磁や国内産の陶磁器などが出土しています。注目されるのは、焼けた土や炭・粘土のかたまりと一緒に鎌倉時代(700年前)の小皿約50点が完全な形でまとまって出てきたことです。このことから、ここで小皿を焼いたことも考えられます。また、江戸時代の絵や茶石も出土しており、貴重な発見として注目されています。

(鹿児島市教育委員会 重久洋一)

縄文早期文化と織物史とに一石を投じる

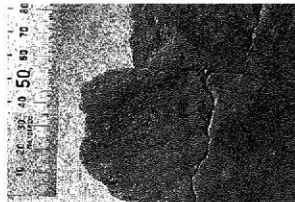
フミカキ遺跡 (所在地: 日置郡元町福山下)

フミカキ遺跡は、南九州西回り自動車道建設に伴い、平成6年11月から平成7年6月まで発掘調査が行われました。この遺跡は、標高170mの台地上にあり、縄文時代早期(約9,000年前)と晩期(約2,800年前)の遺構や遺物に特色があります。

早期の遺構では集石遺構と連穴土坑とが検出されました。早期の集石遺構は、全部で11箇所検出されました。注目されるのは、土層の状況から、出土した土器の中では最も古い土器と考えられる、吉田式土器が使われた時期の集石遺構は、掘り込みがあり2,000個以上の礫が集中していました。これに対して、吉田式土器より少しの層から検出された押型土器や石版式土器が使われた時期の集石遺構は、掘り込みがなく約20個から約50個の礫を集めた比較的小規模なものでした。

また、くんせいを作るのに使ったと考えられる連穴土坑は、吉田式土器が使用された時期の遺構で、1基見つかっています。

一方、縄文時代晩期の遺物では、黒川式土器が出土し、この土器の底に平織の布圧痕がついていました。これまで平織の布は、稲作と一緒に弥生時代に日本へ伝わったと考えられていますが、既に弥生時代以前から平織の布が存在していた可能性が出てきました。



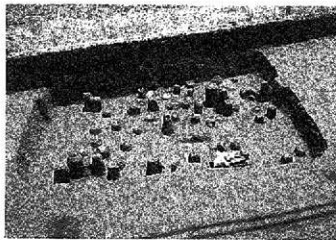
1,500年前の集落発見!

中尾遺跡 (所在地: 日置郡宮平町上名)

中尾遺跡は、県道の改良工事に伴い、平成3年度から調査が行われています。この遺跡は、標高約50mの台地上にあり、縄文時代早期・晩期の遺物や古墳時代の遺構・遺物が発見されています。

今回の調査で注目されるのは、古墳時代の住居跡が新たに4軒検出され、その多くが隅の部分はやや丸くなる隅丸方形と呼ばれる形であったことでした。さらにその住居には2本の柱穴と南側には入り口の施設と考えられる浅い掘り込みが発見されました。そのため、住居が揃っている方向などから同時期に建てられたのではないかと考えられています。

中尾遺跡の調査では、今までに19軒の住居跡が検出されており、絶対23軒の同時代の住

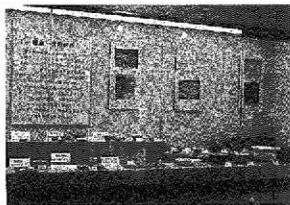


検出された住居跡と出土遺物

学習展示室から

～鎌倉・室町時代～ (12世紀末～14世紀末)

平安時代の終わり(12世紀)頃、地方では武士が勢力を振るい始め、貴族や京都・奈良にある寺院・神社の私有地(荘園)が増加しました。鹿兒島県下においても、島津荘と呼ばれる日本一広大な荘園が、公領(国の役所の領地)が多くありました。これらの荘園・公領には武士がいて年貢の徴収等にあたり、古くから勢力を持っていました。13世紀頃になると、東国から新たに移り住んだ島津・波谷・二階堂・飯島氏等の東国系の武士が勢力を持つようになり、彼らは地元の武士と紛争を繰り返しながら、やがて従えていくようになります。



鎌倉・室町時代部門展示風景

南北朝時代(14世紀)になると、鹿兒島でも武士同士の大規模な争いが各地で繰り返されました。このころ武士は自分の領地を守るために山城を築いて、ここを本拠地としました。以後戦国時代(16世紀末)まで山城は造り続けられました。この山城の跡は現在、県内の各地におよそ800余りが確認され、各地で発掘調査が行われています。

このような状況の中、県内の遺跡から出土する鎌倉・室町時代の遺物には、土師器・陶磁器・古銭等があります。土師器が中心で、

青磁・白磁等も多く使われました。当時の日本では、青磁・白磁を作る技術がなかったことから、中国や朝鮮半島等から輸入されていました。そのほか、長崎県産の滑石製石鍋、備前焼・常滑焼・東播磨焼の陶器が多く出土しています。石鍋や陶器等は、県内で作ることができないもので、いずれも海路や陸路を使って鹿兒島まで運び込まれたものでした。

次に、古銭についてですが、古い記録によると、12世紀末に「銭の病」という病気が流行したとあります。病気の実際はわかりませんが、どうやら当時の人々が金を争って銭貨を得ようとしていたようです。当時の都では、中国から輸入した銭(宋銭)が多く流通していました。京都から遠くはなれた鹿兒島でも例外ではなく、武士や農民が銭貨を所持していたことが古文書によって確認されます。川内市成岡遺跡等多くの遺跡で宋銭が出土し、古文書の記述を裏付けてくれます。

一方、四西諸島に目を転じると独自の遺物に、カムイヤキがあります。13世紀を中心に四西諸島一帯で使用された物で、この類の一つが徳之島で発見されています。また長崎県産の滑石製石鍋は琉球諸島まで持ち運ばれていて、さらに中国・朝鮮半島産の青磁・白磁や東南アジア産の陶器等が幅広く流通していました。これらの事実から、当時の南西諸島では、海を介して東アジア・東南アジア世界との人や物のダイナミックな交流が想像されます。

また、山城に対比される城・グスクが琉球列島から奄美諸島にかけて多く分布しています。

これらの遺物や遺構は、文献史料の少ない南西諸島の歴史を説明する重要な資料となっています。

発掘調査の手順(2)

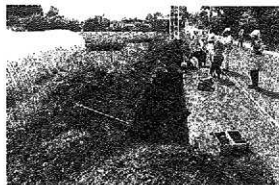
～確認調査～

前回は、地表に出ている遺物の散布などから遺跡の有無を調べる「分布調査」、さらに周辺の地形などから遺跡が存在すると考えられる地域について「周知の遺跡」として登録されることについてお話ししました。

周知の遺跡内に農地整備や道路工事等の開発事業が計画された場合は、遺跡の広がり・深さなどを詳しく調べる調査が必要になります。これを「確認調査」と言います。この確認調査では、事業予定区域全域にわたって、一定間隔でトレンチとよばれる数メートルの溝を掘り、状況把握を行います。

例えば、南種子町横差C遺跡では、新しく畑を作るために発掘調査を行ったのですが、この結果、約3万年前の副洞跡が発見されたため、町が遺跡の保存を決めました。このように、確認

調査の結果に基づき、開発事業を行う人たちと果、市町村の関係機関と協議して、できるだけ遺跡を壊すように努めています。この協議については次号でお話します。



遺跡の状況を確認するトレンチ

～「写場」から～

埋蔵文化財センターの中には、「写場」という写真撮影用のスタジオがあります。

発掘調査が終わると、発掘調査の成果を公開するために報告書を作ります。遺物などの写真を報告書に載せるため、出土した土器や石器の細かい部分の特徴までよく写るように撮影します。

それではどのような点に注意しながら撮影すると良いのでしょうか。

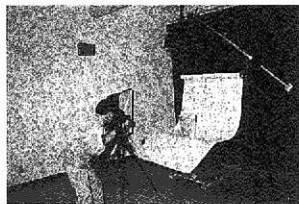
例えば、土器のガラガラとした感じや文様が、鮮明にしかも立体感が出るように影を作って撮影します。黒曜石などの石器は、ツルツルやピカピカとした感じが出るようにレフ板という反射板の反射光を利用して撮影したりします。

このように遺物の細かい部分の特徴を撮影するため、精密な大型のカメラやストロボという大型照明用ライト等が必要になります。

そのほか、きびでボロボロになった青銅や鉄などの金属製品の元の形やそれに何かに刻まれているかどうかをエックス線を利用して撮るエッ

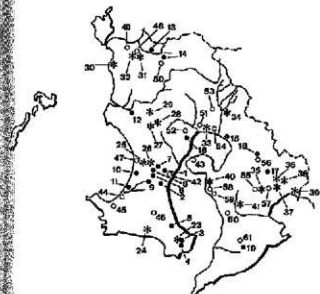
クス線撮影装置もありです。一方、墨で書かれた文字や文様は、時間がたつにつれて薄くなりついには消えてしまいます。そこで、見た目にはかすれてわからないものを明暗に異なる赤外線撮影も行います。(エックス線や赤外線は、まるで魔法の光線みたいですね。)

このように埋蔵文化財センターの写場は、形状や文様などを正確に撮影したり、科学的な方法で昔のことを調べたりするために使われています。



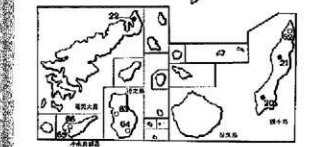
大型ライトを使った精密な撮影

～あなたも、遺跡をのぞいてみませんか？～



9月から調査予定の遺跡(●印)

遺跡名	調査	所在地	時代
23 向古上	市	南相模郡向古上	縄～屋
24 柳川	町	南相模郡柳川	古～屋
25 花渡	町	伊豆郡花渡	縄
26 大塚	町	松元町大塚	縄
27 南ヶ谷	町	大塚町南ヶ谷	縄
28 中宿	町	中宿	縄
29 新井	町	入来町新井	縄
30 島崎	町	島崎	縄
31 深町	町	田本町深町	縄
32 八幡	町	八幡	縄
33 磯原	町	加治木町日本山	縄
34 井ノ木	町	後編町井ノ木	縄
35 磯原	町	磯原	縄
36 宇津	町	松山町宇津	縄
37 伊ノ谷	町	伊ノ谷	縄
38 西ノ谷	町	松山町西ノ谷	縄
39 西ノ谷	町	志保町西ノ谷	縄
40 西ノ谷	町	志保町西ノ谷	縄
41 本郷	町	鹿沼市本郷	古



7～8月調査終了の遺跡(○印)

遺跡名	調査	所在地	時代
42 下野山	町	下野山	縄
43 下野山	町	下野山	縄
44 下野山	町	下野山	縄
45 下野山	町	下野山	縄
46 下野山	町	下野山	縄
47 下野山	町	下野山	縄
48 下野山	町	下野山	縄
49 下野山	町	下野山	縄
50 下野山	町	下野山	縄
51 下野山	町	下野山	縄
52 下野山	町	下野山	縄
53 下野山	町	下野山	縄
54 下野山	町	下野山	縄

遺跡については、<調査>の欄に「●」とある遺跡の場合にセンターへ「●・町・村」とある遺跡の場合にその町村へお問い合わせください。

4月以降調査継続中の遺跡(●印)

遺跡名	調査	所在地	時代
1 山ノ中	町	鹿兒島市山ノ中	縄～古
2 東迫	市	鹿兒島市東迫	縄～古
3 機生川	市	指宿市機生川	縄～屋
4 中小路	市	指宿市中小路	縄
5 站地	町	喜入町站地	縄～縄
6 南原	町	松元町南原	縄
7 南山	町	松元町南山	縄
8 仁田尾	町	松元町仁田尾	縄
9 西畑	町	松元町西畑	縄
10 赤井田	町	次上町赤井田	縄
11 白糸原	町	金峰町白糸原	縄
12 永野城	市	川内市永野	縄
13 御山	町	川内市御山	縄
14 米原	町	大口町米原	縄
15 上野原	町	島分町上野原	縄
16 中野	町	松元町中野	縄
17 神	町	大隅町神	縄
18 上ノ原	町	茶吉町上ノ原	縄
19 連	町	喜平町連	縄
20 柳ヶ谷	町	南種子町柳ヶ谷	縄
21 三角山	町	中種子町三角山	縄
22 平賀	町	安良町平賀	縄

縄縄発見

今夏も県内で約70か所の発掘調査が、残りの中行われました。全国的に関心が高まりつつある縄縄文化財ですが、本県の発掘調査でも数千人にもなる作業員のみならずの汗と感動の結晶として掘り出されています。さらに、各地の小・中学校で行われている発掘体験学習では、土器や石器を掘り出した時の子供たちの驚きと喜びと楽しさに満ちた顔に出会いました。様々な感動につつまれた発掘調査現場、原さそを恐れるひとときがあります。

歴史文より 第9号
発行日：平成7年9月1日
編集・発行：
鹿兒島県立縄縄文化財センター
〒899-56
鹿兒島県指宿市松元6252
TEL 0995-65-8787
FAX 0995-65-8117